

平安京左京五条二坊八町跡・
妙満寺の構え跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一九―四

平安京左京五条二坊八町跡・妙満寺の構え跡

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京五条二坊八町跡・
妙満寺の構え跡

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物建設に伴う平安京跡・妙満寺構え跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

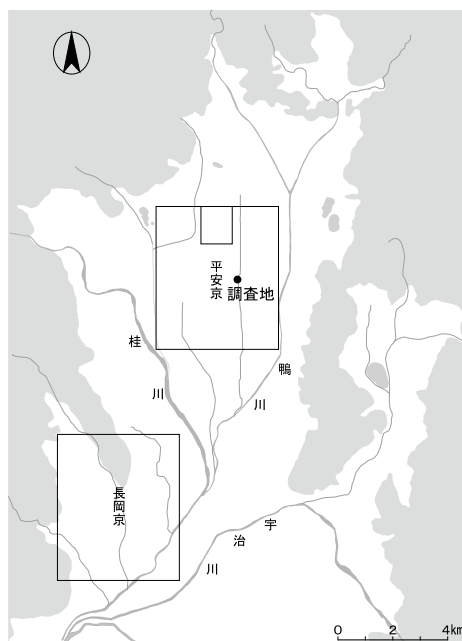
令和元年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京跡・妙満寺の構え跡（京都市番号 18H617） |
| 2 調査所在地 | 京都市下京区四条通堀川西入唐津屋町527番地他 |
| 3 委 託 者 | 平安埋蔵文化財事務所株式会社 代表取締役 池田光繁 |
| 4 調査期間 | 2019年5月7日～2019年7月3日 |
| 5 調査面積 | 270㎡ |
| 6 調査担当者 | 小檜山一良・松吉祐希 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし柱列は別に通し番号を付けた。 |
| 12 遺物番号 | 土器類・土製品、瓦類、石製品ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 小檜山一良
付章：北野信彦（龍谷大学） |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 遺 跡	3
(1) 遺跡の位置と環境	3
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 遺構の概要	9
(3) 1区の遺構	10
(4) 2区の遺構	13
4. 遺 物	17
(1) 遺物の概要	17
(2) 土器類・土製品	18
(3) 瓦類	21
(4) 石製品	23
5. まとめ	25
付章 出土した鑄造関連試料の分析調査	28

図 版 目 次

図版1	遺構	1区第2面（平安時代中期）平面図（1：100）
図版2	遺構	1区第1面（平安時代後期から江戸時代）平面図（1：100）
図版3	遺構	1区北壁・東壁断面図（1：50）
図版4	遺構	2区第2面（平安時代中期）平面図（1：100）
図版5	遺構	2区第1面（平安時代後期から江戸時代）平面図（1：100）
図版6	遺構	2区北壁・西壁断面図（1：50）
図版7	遺構	1 1区第2面全景（北西から） 2 井戸120（東から）

- 図版8 遺構 1 1区第1面全景（北西から）
 2 土坑103（南から）
 3 井戸2（南から）
- 図版9 遺構 1 2区第2面全景（北東から）
 2 井戸168（東から）
- 図版10 遺構 1 2区第1面全景（北東から）
 2 井戸140（西から）
- 図版11 遺物 出土土器・瓦類

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	1区調査前全景（北西から）	2
図4	2区調査前全景（北東から）	2
図5	1区調査状況（北から）	2
図6	大学生発掘現場研修（南から）	2
図7	周辺調査位置図（1：2,500）	4
図8	基本層位図（1：40）	9
図9	井戸120実測図（1：50）	10
図10	柱列1実測図（1：40）	10
図11	土坑103実測図（1：20）	11
図12	柱列2実測図（1：40）	11
図13	井戸2実測図（1：50）	12
図14	井戸168実測図（1：50）	13
図15	土坑213実測図（1：20）	14
図16	土坑213瓦器羽釜出土状況（北西から）	14
図17	井戸140実測図（1：50）	15
図18	柱列3実測図（1：40）	15
図19	井戸120・168、柱穴32出土土器実測図（1：4）	18
図20	土坑10・15・35・103・213出土土器実測図（1：4）	19
図21	土坑150・155・190・201、井戸140 出土土器・土製品実測図（1：4、35のみ1：3）	20

図22	井戸142・209出土土器・土製品 拓影及び実測図（42・43は1：4、44・45は1：2）	20
図23	瓦類拓影及び実測図（1：4）	22
図24	石製品実測図（1：4）	23
図25	遺構変遷図（1：300）	26
図26	滴物質の付着状態写真	31
図27	滴箇所拡大写真1	32
図28	滴箇所拡大写真2	33
図29	滴物質・胎土の蛍光X線分析結果1	34
図30	滴物質・胎土の蛍光X線分析結果2	35

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	5
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	17
表4	土器類・土製品観察表	24
表5	各試料の無機分析結果	36

平安京左京五条二坊八町跡・妙満寺の構え跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

調査地は、京都市下京区四条通堀川西入唐津屋町527番地他に所在し、平安京跡・妙満寺の構え跡にあたる。当地に建物建設が計画されたことから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）により試掘調査が実施され、遺構が良好な状態で検出された。このことから文化財保護課は、発掘調査が必要と判断した。調査は、原因者から委託された公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

調査の目的は、平安京跡・妙満寺の構え跡に関連した遺構の確認とその変遷を明らかにすることである。

(2) 調査の経過

調査は、敷地中央部に存在する建物地下室基礎を避けて東西2箇所に調査区を設けた（東を1区、西を2区とした）。調査面積は計270㎡である。

2019年5月7日から重機により1区の近現代盛土を掘削したのち、以降は人力にて掘削、調査を行った。地表下約0.4m（標高約33m）の平安時代後期の整地層上面（第1面）で、平安時代後期

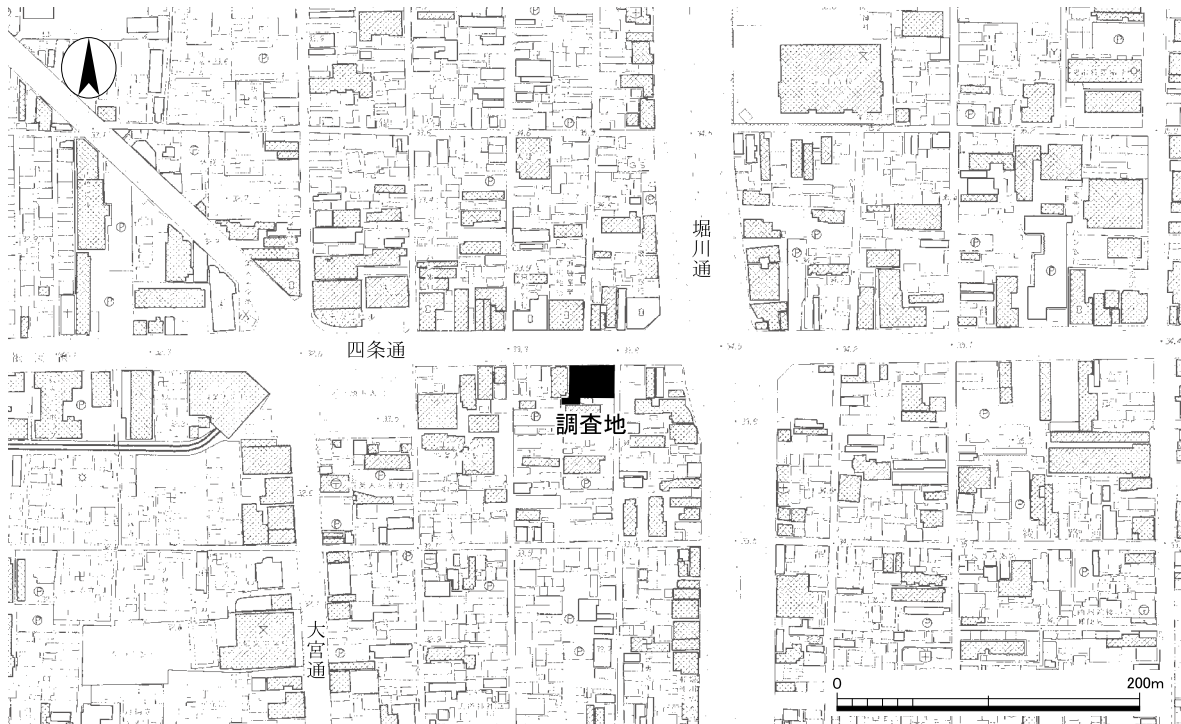


図1 調査位置図（1：5,000）

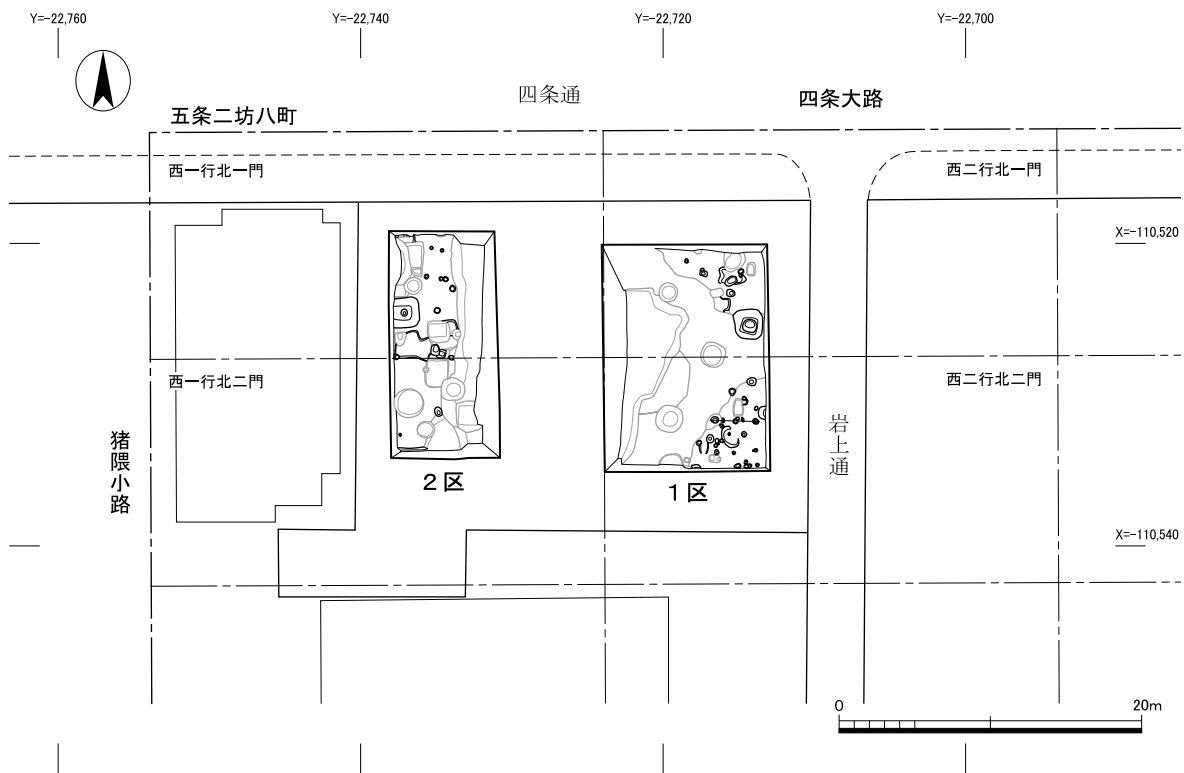


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 1区調査前全景 (北西から)



図4 2区調査前全景 (北東から)



図5 1区調査状況 (北から)



図6 大学生発掘現場研修 (南から)

から江戸時代の井戸や柱穴・土坑などを検出した。整地層を除去した地山面（第2面）では、平安時代中期の井戸や柱穴・土坑を検出した。1区の調査終了後に、敷地内西側に仮置きしていた排土で調査区を埋め戻した。

次いで2区の調査を開始し、平安時代の井戸・柱穴・土坑、室町時代の井戸・柱穴・土坑、江戸時代の井戸・柱列・土坑などを検出した。調査は7月3日に終了した。

遺構の記録は、随時実測図を作成し、適宜写真撮影を行った。調査中の排土は場内に仮置きし、調査終了後に埋め戻した。調査中は適時、文化財保護課の臨検・指導を受け、さらに検証委員（龍谷大学の國下多美樹氏、同志社大学の浜中邦弘氏）による視察・助言を受けた。

調査中に京都精華大学人文学部の演習科目「フィールド・スタディーズ」の一環として学生2名の発掘現場研修を受け入れた。

2. 遺 跡

（1）遺跡の位置と環境

調査地は、京都盆地を南流する鴨川右岸に堆積した鴨川扇状地の高まりにあり、北東から南西方向にわずかに傾斜する緩扇状地の地形に立地する。

調査地の東南側約250mには、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である烏丸綾小路遺跡が位置する。これまでに行われた調査では、竪穴建物跡・環濠・方形周溝墓などが見つかっており、大規模な集落であったことが判明している。

平安京への遷都に伴い、当地は平安京左京五条二坊八町に位置するようになる。北を四条大路・東を堀川小路・南を綾小路・西を猪隈小路に囲まれる。四行八門の区画では、西一・二行、北一・二門にあたり、八町の北西隅にあたる。周辺には貴族の邸宅があったことが史資料に認められる。『拾芥抄』によれば、平安時代には、二坊三町から六町は天皇の退位後の居所である「後院（五条院）」が存在したという。平安時代末期には、十町には宰相入道藤原俊憲（信西入道藤原道憲の子）の邸宅、十五町には大納言藤原邦綱の邸宅が存在したことが知られる。

鎌倉時代から室町時代にかけて、当地周辺の下京の市街景観は大きく変化する。商工業の発展や新仏教の興隆による寺院の建立がこれを促した。寺院では、妙満寺・本禅寺など法華宗寺院などを中心にした寺院が寺地を占めた。室町時代には酒屋・油屋・材木屋・綿屋・米屋・扇屋などが軒をならべ、商工業地域を形成した。

なお、妙満寺は応永2年（1395）以降、綾小路東洞院に伽藍を造営していたが、応仁・文明の乱（応仁元年：1467～文明9年：1477）により焼亡したため、当地に移転した。しかし、天文法華の乱（天文5年：1536）により再度伽藍が焼失し、一時堺に移転した。その後、天文11年（1542）に後小松天皇の綸旨により京に戻り、当地に再度伽藍を造営した。

天正年間に豊臣秀吉は京都の都市改造に着手する。その一環として東側の御土居に沿って寺町

が形成され、天正11年（1583）に妙満寺は寺町二条に転出する。寺域跡地は町家となり、人家が密集し、さらに市街は拡大していく。文禄3年（1594）、フランシスコ会士の修道士が妙満寺跡地に教会を建設し、翌年には聖アンナ病院・聖ヨゼフ病院を建設した。

（2）周辺の調査（図7、表1）

調査地周辺では、これまで発掘調査は少ないが、多くの試掘・立会調査が実施され、各時代の多岐にわたる遺構を検出している。図7に周辺における調査地点を明示し、表1に調査概要を記載した。図中の調査番号は本文中の番号と一致する。

主な成果のあった調査をあげる。

四条二坊四町の調査1では、平安時代前期・中期遺物包含層が検出された。

四条二坊五町の調査8では、平安時代中期から後期の土坑・ピット、室町時代の土坑・ピットが検出され、ピットから勾玉が出土した。

四条二坊十二町の調査12では、平安時代の土坑・柱穴が検出された。調査14では、江戸時代の柱穴が検出された。調査15では、室町時代の土坑が検出された。

五条二坊一町の調査16では、平安時代の溝・土坑、室町時代の土坑が検出された。調査23では、中世後半から近世の土坑・柱穴・溝・自然流路が検出された。調査22では、平安時代後期の土坑が検出された。

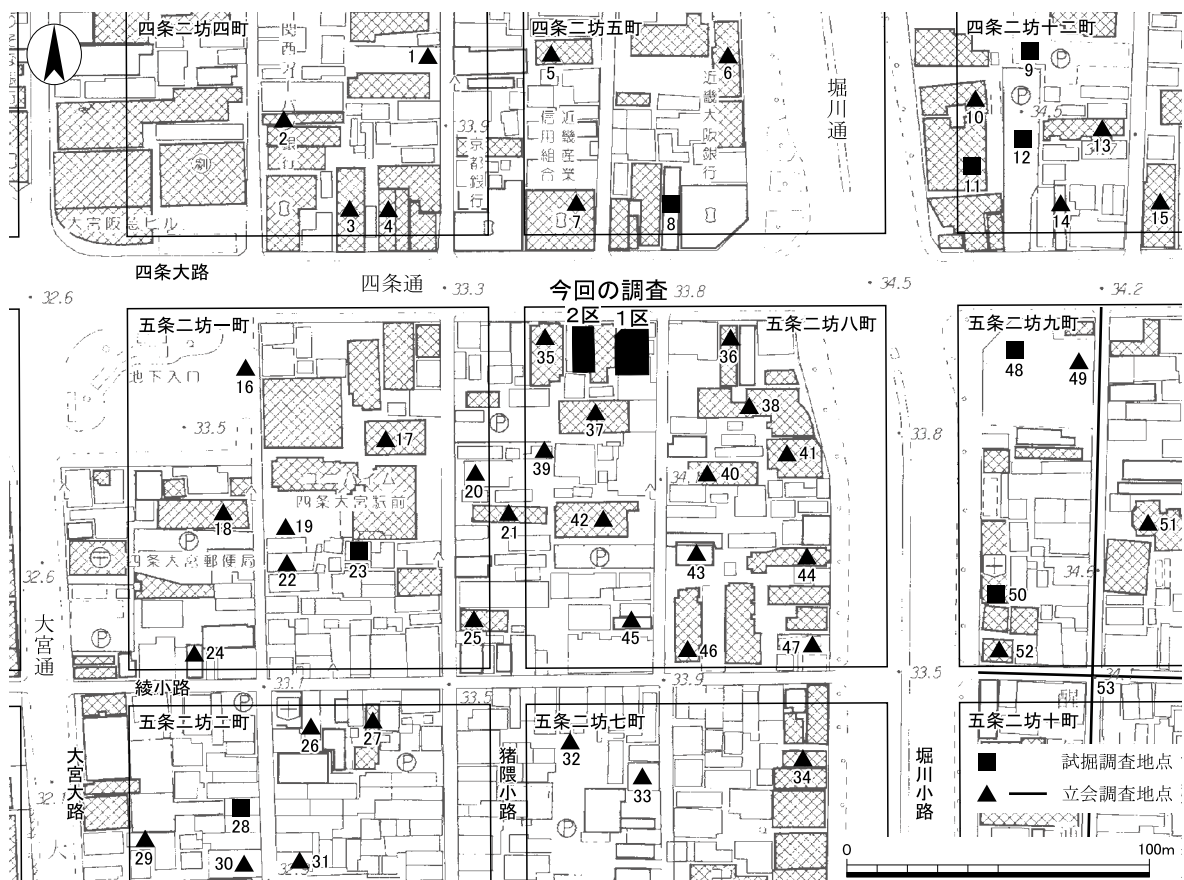


図7 周辺調査位置図（1：2,500）

表1 周辺調査一覧表

No.	調査記号	調査方法	条坊	所在地	調査概要	文献
1	91HL59	立会	四条二坊四町	猪熊通錦小路下る錦猪熊町531	GL-0.6m以下、平安前期・中期の包含層各1。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
2	92HL336	立会	四条二坊四町	新シ町通錦小路下る藤岡町512-1・2	GL-0.5mにて平安の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』京都市文化観光局 1994年
3	96HL91	立会	四条二坊四町	四条通大宮東入立中町499	No.1 GL-0.38mにて包含層、土師器。-0.8mで時期不明の土坑、土師器。No.2 -0.75mにて近世の土坑。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化観光局 1997年
4	95HL127	立会	四条二坊四町	四条通黒門東入立中町497	GL-0.66mにて鎌倉～室町の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京都市文化観光局 1996年
5	88HL129	立会	四条二坊五町	岩上通四条上る松浦町862	GL-0.82m以下、平安後期の包含層1、室町の包含層1。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
6	86HL37	立会	四条二坊五町	東堀川通四条上る錦堀川町640、649	GL-0.06m以下、平安後期～鎌倉の包含層、時期不明の包含層2。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
7	98HL35	立会	四条二坊五町	四条通堀川西入唐津屋町524-3	GL-0.25mにて平安の包含層(土師器、緑釉陶器、瓦)。-1.05m以下、褐灰色粗砂の地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化観光局 1999年
8	81HL54	試掘	四条二坊五町	四条通堀川西入唐津屋町526-2、528	平安中期～後期の土坑3・ピット6、室町の土坑2・ピット6。ピットより勾玉2個。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年
9	12H053	試掘	四条二坊十二町	堀川通四条上る錦堀川町637他	GL-2.3mにて中世の包含層。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
10	88HL106	立会	四条二坊十二町	東堀川通四条上る錦堀町648-2	GL-1.1mにて江戸の包含層。-1.25m以下、時期不明の流れ堆積。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
11	84HL1	試掘	四条二坊十二町	東堀川通四条上る錦堀川町650他	GL-1.6m以下、鎌倉～江戸の包含層2。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
12	15HL335	試掘	四条二坊十二町	四条通堀川東入柏屋町5	平安時代の土坑・柱穴。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016年
13	86HL131	立会	四条二坊十二町	醒ヶ井通四条上る藤西町601	GL-0.75m以下、江戸の包含層2。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
14	91HL253	立会	四条二坊十二町	四条通東堀川東入柏屋町7	GL-1.1mにて江戸の柱穴。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
15	90HL155	立会	四条二坊十二町	四条通醒ヶ井東入柏屋町17他	GL-1.05mにて室町の土坑2。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
16	83HL62	立会	五条二坊一町	四条通大宮東入立中町488-2、490-2	GL-0.8mにて平安の溝1・土坑2、室町の土坑2。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
17	96HL236	立会	五条二坊一町	猪熊町四条下る松本町260	No.1 GL-1.0mにて江戸の井戸状遺構、染付、白磁。-1.3mにて平安の包含層。 No.2 -1.3mにて室町の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化観光局 1997年
18	94HL119	立会	五条二坊一町	黒門通四条下る下り松町155、156-2	GL-0.48mにて江戸の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
19	03HL281	立会	五条二坊一町	黒門通四条下る下り松町152他	No.1 GL-0.65mにて江戸の包含層、-1.15mにて室町の包含層。 No.3 -0.9mにて室町の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
20	95HL43	立会	五条二坊一町	猪熊通四条下る松本町265-1・2	排土から平安後期～鎌倉の土師器・須恵器。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京都市文化観光局 1996年
21	15HL371	立会	五条二坊一・八町	猪熊通四条下る松本町263	GL-1.1mにて室町の包含層。-1.24mにて平安後期整地層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016年

No.	調査記号	調査方法	条坊	所在地	調査概要	文献
22	80HL120	立会	五条二坊一町	黒門通四条下る下り松町158	GL-1.1～1.2mにて鎌倉の包含層。下層で平安後期の土坑1。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
23	01HL37	試掘	五条二坊一町	黒門通四条下る下り松町158他	中世後半～近世の土坑・柱穴・溝・自然流路。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
24	18HL630	立会	五条二坊一町	黒門通四条下る下り松町167	GL-1.33mにて室町以降の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成30年度』京都市文化市民局 2019年
25	84HL142	立会	五条二坊一町	猪熊通四条下る松本町280	GL-0.3mにて江戸の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
26	84HL301	立会	五条二坊二町	綾小路通黒門東入丸屋町556	GL-0.42m以下、平安後期・室町・江戸の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
27	96HL145	立会	五条二坊二町	綾小路通猪熊西入丸屋町558、558-3・4・5	平安中期の柱穴1基、平安後期の建物2棟・井戸・土坑・柱穴、鎌倉の土坑・柱穴、室町の土坑・柱穴、桃山～江戸前期の土坑・柱穴、江戸中期～後期の土坑。土師器・須恵器・黒色土器・白色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・白磁・青磁・瓦・石製品。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化観光局 1997年
28	89HL189	試掘	五条二坊二町	東堀川通綾小路下る錦堀川町293-1	GL-1.0mにて鎌倉～室町の小穴・土坑。-1.38mにて室町の南北溝。推定堀川小路東側溝。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
29	10HL057	立会	五条二坊二町	大宮通綾小路下る綾大宮町52～54	GL-0.77mにて江戸前期の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011年
30	88HL170	立会	五条二坊二町	黒門通綾小路下る塩屋町183	GL-0.55mにて鎌倉の包含層。-1.33mにて時期不明の落込み。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
31	89HL14	立会	五条二坊二町	黒門通綾小路下る塩屋町182他	GL-0.65mにて平安前期の土坑2・後期の土坑3、時期不明の土坑2。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
32	07HL021	立会	五条二坊七町	綾小路通堀川西入妙満寺町575	No.2 GL-1.25mにて江戸後期の包含層。No.3-0.6mにて室町後期の包含層。No.5 -1.65mにて平安後期の湿地状堆積。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
33	93HL124	立会	五条二坊七町	岩上通綾小路下る雁金町400-6	GL-1.05m以下、平安後期の包含層。鎌倉の落込み。室町の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』京都市文化観光局 1994年
34	99HL187	立会	五条二坊七町	堀川通綾小路下る綾堀川町298他	No.1 GL-0.7mにて江戸の包含層。No.2 -0.13mにて江戸の包含層、-0.32mで室町の包含層、-0.49mにて室町の土坑・包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
35	95HL387	立会	五条二坊八町	四条通堀川西入唐津屋町517、519	GL-0.5mにて江戸の包含層、陶器、瓦。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化観光局 1997年
36	81HL39	立会	五条二坊八町	四条通堀川西入唐津屋町536、536-1	GL-0.4mにて平安中期・後期の土坑。時期不明の土坑。	『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年
37	87HL140	立会	五条二坊八町	岩上通四条下る佐竹町382	GL-0.55mにて室町の土坑。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
38	98HL103	立会	五条二坊八町	堀川通四条下る四条堀川町257	GL-0.9mにて鎌倉の包含層(土師器、青磁、瓦)。-1.4m以下、褐色粗砂の地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化観光局 1999年

No.	調査記号	調査方法	条坊	所在地	調査概要	文献
39	05HL079	立会	五条二坊八町	猪熊通四条下る松本町256-1、261	No.1 GL-0.87mにて室町中期・前期の落込み、-1.53mにて平安後期の包含層、-1.64mにて平安中期の包含層。No.2 -1.04mにて鎌倉前期の包含層。No.3 -1.04mにて江戸の包含層、-1.2mにて鎌倉の落込み。No.4 -0.62mにて鎌倉中期の包含層、-1.0mにて平安後期の包含層。No.5-0.68mにて平安後期の包含層。No.6 -0.79mにて平安中期の包含層、-0.89mにて平安前期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
40	02HL257	立会	五条二坊八町	岩上通四条下る佐竹町398	No.1 GL-1.23mにて室町後期の包含層。No.2-1.83mにて室町前期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
41	98HL13	立会	五条二坊八町	堀川通四条下る四条堀川町261-1	GL-0.25mにて江戸の土坑。-0.9m以下、にぶい褐色砂泥・砂礫の地山	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化観光局 1999年
42	97HL478	立会	五条二坊八町	岩上通四条下る佐竹町392-1・2	平安後期～鎌倉の東西方向の濠状遺構。室町の石組井戸。土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化観光局 1999年
43	10HL347	立会	五条二坊八町	岩上通四条下る佐竹町393-1他	GL-0.6mにて鎌倉の土坑。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
44	99HL444	立会	五条二坊八町	堀川通四条下る四条堀川町273他	No.1 GL-0.33mにて室町の落込み。No.2 -0.65mにて室町の土坑。No.3 -0.95mにて室町の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
45	84HL122	立会	五条二坊八町	岩上通錦小路上る妙満寺町574-4	GL-0.5m以下、江戸の包含層2。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
46	93HL39	立会	五条二坊八町	綾小路通堀川西入妙満寺町581-1・2・3	GL-1.0mにて平安後期の井戸。土師器・瓦器・軒平瓦。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』京都市文化観光局 1994年
47	04HL187	立会	五条二坊八町	堀川通四条下る四条堀川町285他	GL-0.64mにて江戸後期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』京都市文化市民局 2005年
48	03H315	試掘	五条二坊九町	堀川通四条下る四条堀川町262他	GL-2.5mにて平安中期の井戸。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
49	87HL50	立会	五条二坊九町	醒ヶ井通四条下る高野堂町397	GL-0.35mにて室町の包含層。-0.7mにて室町の土坑。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
50	17HL147	試掘	五条二坊九町	堀川通四条下る四条堀川町272-6他	GL-1.0mにて土坑・柱穴。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成30年度』京都市文化市民局 2019年
51	91HL92	立会	五条二坊九町	醒ヶ井通四条下る高野堂町406	GL-0.35m以下、平安後期1・鎌倉1・室町1・時期不明2の包含層。時期不明の土坑1。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
52	82HL95	立会	五条二坊九町	綾小路通醒ヶ井西入西半町79	GL-0.8mにて平安の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年
53	87HL163	立会	五条二坊九町	醒ヶ井通四条下る高野堂町地先	GL-0.78mにて室町の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年

五条二坊二町の調査27では、平安時代中期の柱穴、平安時代後期の建物・井戸・土坑・柱穴、鎌倉時代の土坑・柱穴、室町時代の土坑・柱穴、桃山時代から江戸時代前期の土坑・柱穴、江戸時代中期から後期の土坑が検出された。出土遺物は多く、土師器・須恵器・黒色土器・白色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・白磁・青磁・瓦・石製品が出土した。調査28では、鎌倉時代から室町時代の小穴・土坑、室町時代の堀川小路東側溝とみられる南北溝が検出された。調査31では、平安時代前期の土坑、平安時代後期の土坑が検出された。

五条二坊七町の調査32では、平安時代後期の湿地状堆積が検出された。調査33では、鎌倉時代の落込みが検出された。調査34では、室町時代の土坑が検出された。

五条二坊八町の調査36では、平安時代中期・後期の土坑が検出された。調査37では、室町時代の土坑が検出された。調査39では、鎌倉時代の落込みが検出された。調査41では、江戸時代の土坑が検出された。調査42では、平安時代末から鎌倉時代の濠、室町時代の井戸が検出され、土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。調査43では、鎌倉時代の土坑が検出された。調査44では、室町時代の土坑・落込みが検出された。調査46では、平安時代後期の井戸が検出され、土師器・瓦器・軒平瓦が出土した。

五条二坊九町の調査48では、平安時代中期の井戸が検出された。調査49では、室町時代の土坑が検出された。

以上のように平安時代と室町時代の遺構が多く検出されていることがわかる。

参考文献

『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局 2019年

『平安京提要』角川書店 1994年

『京都の歴史』学芸書林 1976年

『妙満寺志稿』妙塔山妙満寺蔵 1892年

『キリシタン史略年表』日本福音教団富谷協会

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図8)

1区と2区の基本層序を記述する。地表面は標高約33.3～33.5mである。

1区北壁では、厚さ約0.45mの近現代盛土層の下に厚さ約0.4mの平安時代後期整地層が存在する。整地層の下は暗灰黄色砂礫の地山となる。

2区西壁では、厚さ約0.55mの近現代盛土層の下に厚さ約0.2mの平安時代後期整地層が存在する。整地層の下は暗灰黄色砂礫や黒褐色砂礫の地山となる。

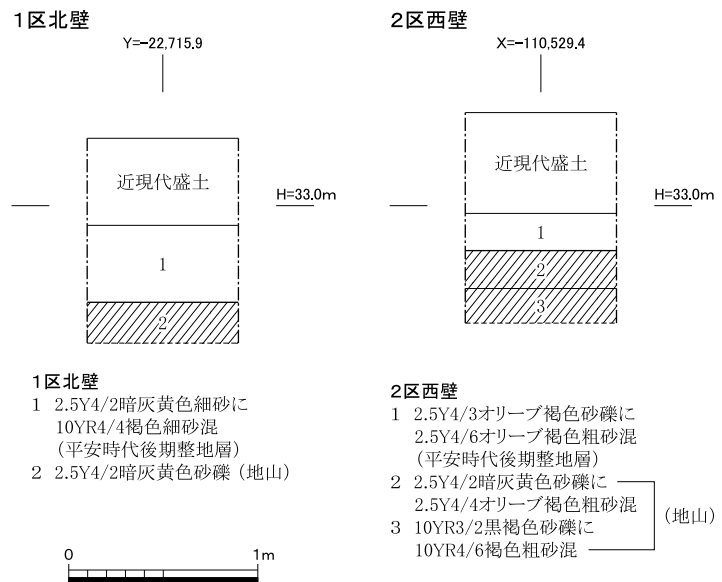


図8 基本層位図 (1 : 40)

(2) 遺構の概要

平安時代後期整地層の上面を第1面、整地層を除去した地山面を第2面として調査を行った。今回の調査で検出した遺構は235基である。第1面では平安時代後期から江戸時代までの各時代の遺構、第2面では平安時代中期の遺構を検出した。時期別では、平安時代中期と室町時代後期の遺構が多い。なお、奈良時代以前の遺構は検出していない。

以下、各調査区に分けて時代の古い順に報告する。

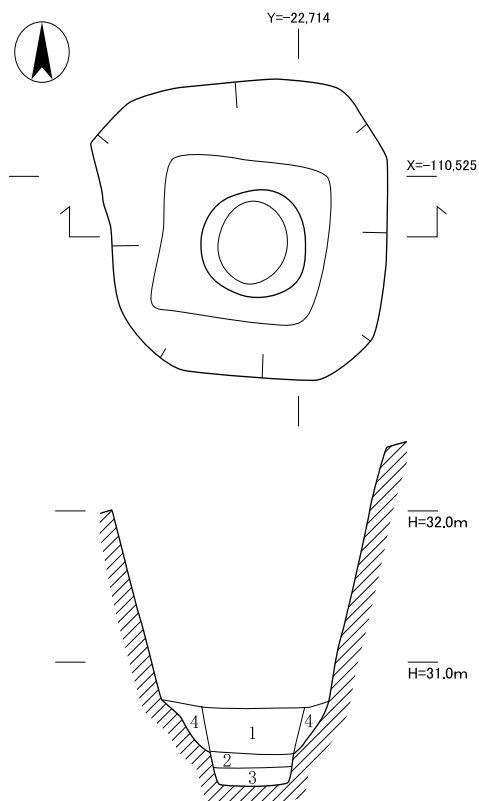
表2 遺構概要表

時 代	遺 構		備 考
	1 区	2 区	
平安時代中期	井戸120、柱列1	井戸168、柱穴161・189・206、土坑214・222、溝135	1期
平安時代後期 ～室町時代前期	柱列2、土坑8・10・15・35・72・103	土坑172・213・215	2期
室町時代後期	柱穴89、土坑5・7・85	井戸140、柱列3、土坑150・155・190・200・201	3期
江戸時代	井戸1・2・3・90、土坑6	井戸142・153・209	4期

(3) 1区の遺構

1) 第2面（平安時代中期）の遺構（図版1・7）

井戸120（図9、図版7） 北東部で検出した。掘形は南北約2.0m、東西約2.0m、深さ約2.6m。



- 1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粗砂
- 2 2.5Y3/2黒褐色粗砂粘質 φ1~5cmの礫中量
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂粘質 φ0.5~3cmの礫中量
- 4 10YR4/2灰黄褐色粗砂粘質 φ2~10cmの礫中量



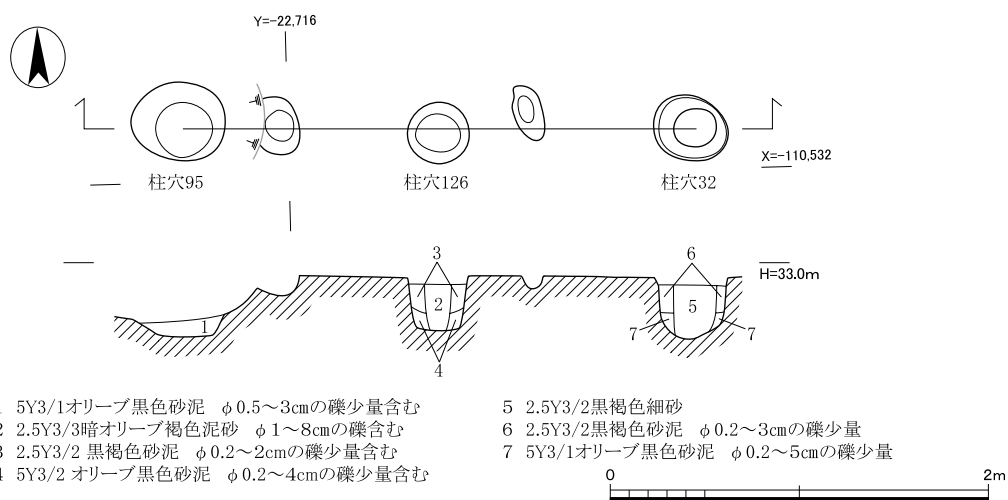
図9 井戸120実測図（1：50）

平面形は方形を呈する縦板組の井戸である。下段に一辺約1.1mに組んだ縦板の痕跡を確認した。底部中央には径約0.8mの曲物の痕跡を確認した。曲物内及び周辺では完形に近い状態の土師器皿が複数枚出土している。埋土は暗オリーブ褐色粗砂・灰黄褐色粗砂などを主体とする。土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器、瓦類が出土した。

柱列1（図10） 南東部で検出した東西方向の柱列である。西から柱穴95・126・32の3基が並ぶ。径0.3~0.5m、深さ0.1~0.3m。柱間は約1.3m。埋土はオリーブ黒色砂泥・黒褐色細砂を主体とする。土師器・須恵器が出土した。

2) 第1面（平安時代後期から江戸時代）の遺構（図版2・8）

土坑35 南東部で検出した。規模は南北約1.2m、東西約0.7m、深さ約0.2m。平面形は南北に長い長方形を呈する。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。平安時



- 1 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 φ0.5~3cmの礫少量含む
- 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 φ1~8cmの礫含む
- 3 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 φ0.2~2cmの礫少量含む
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥 φ0.2~4cmの礫少量含む
- 5 2.5Y3/2黒褐色細砂
- 6 2.5Y3/2黒褐色砂泥 φ0.2~3cmの礫少量
- 7 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 φ0.2~5cmの礫少量



図10 柱列1実測図（1：40）

代後期の遺構である。

土坑103(図11、図版8) 北東部で検出した。規模は南北約1.1m、東西約0.6m、深さ約0.3m。北西部を後世の遺構により削平される。平面形は南北に長い楕円形を呈する。土坑内からは完形に近い状態の土師器皿が多数出土している。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・須恵器・輸入陶磁器が出土した。平安時代後期の遺構である。

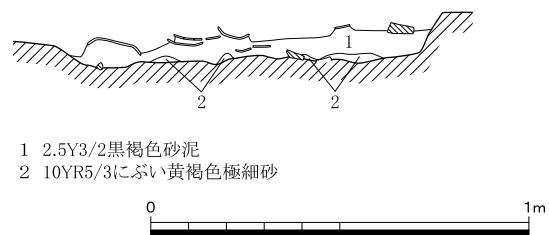
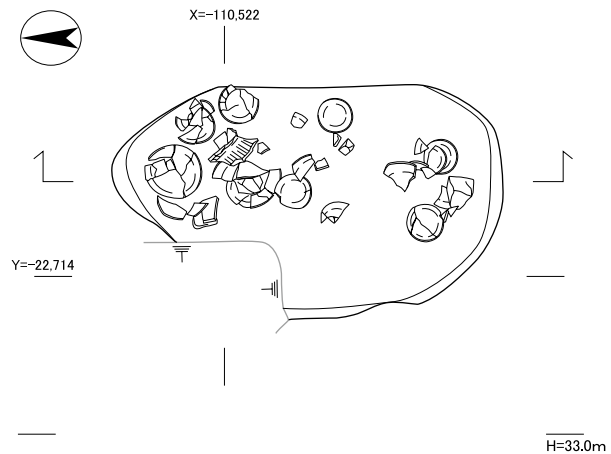


図11 土坑103実測図(1:20)

柱列2(図12) 南東部で検出した東西方向の柱列である。西から柱穴121・122と2基が並ぶ。径約0.4m、深さ0.2~0.4m。ともに約0.2m大の地下式礎石を底部に据え付ける。柱間は約1.7m。埋土は暗オリーブ褐色泥砂・黒褐色砂泥を主体とする。土師器が出土した。鎌倉時代の遺構である。

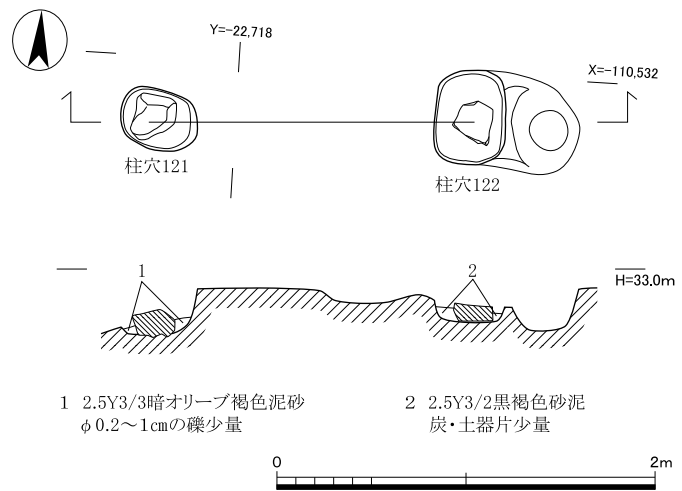


図12 柱列2実測図(1:40)

土坑15 南東部で検出した。規模は南北約1.6m、東西約1.1m、深さ約0.2m。南西部を後世の柱穴によって削平される。平面形は不定形を呈する。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・瓦器・輸入陶磁器、瓦類が出土した。鎌倉時代の遺構である。

土坑72 北東部で検出した。規模は南北約1.5m、東西1.2m以上、深さ約

0.3m。中央部と南西部を攪乱により削平される。平面形は不定形を呈する。埋土は灰黄褐色砂泥を主体とする。土師器・須恵器、軒平瓦が出土した。鎌倉時代の遺構である。

土坑8 南東部で検出した。規模は南北約0.7m、東西約0.6m、深さ約0.3m。平面形は楕円形を呈する。埋土は黒褐色泥砂を主体とする。土師器・瓦器・焼締陶器、石製羽釜が出土した。室町時代前期の遺構である。

土坑10 南東部で検出した。規模は南北約1.4m、東西約1.1m、深さ約0.2m。平面形は不定形を呈する。埋土は黒褐色泥砂を主体とする。土坑8に北西部を削平される。土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。室町時代前期の遺構である。

土坑5 南東部で検出した。規模は南北約0.7m、東西0.7m以上、深さ約0.1m。東側は調査区外に延びる。平面形は方形を呈する。埋土は黒褐色泥砂を主体とする。土師器・瓦器、瓦類が出土した。室町時代後期の遺構である。

土坑7 南東部で検出した。規模は南北0.5m以上、東西約1.7m、深さ約0.1m。南側は調査区外に延びる。平面形は不定形を呈する。埋土は黒褐色泥砂を主体とする。炭・焼土を少量含む。土師器・瓦器・焼締陶器が出土した。室町時代後期の遺構である。

土坑85 北東部で検出した。規模は南北1.5m以上、東西約1.4m、深さ約0.4m。北側は調査区外に延びる。平面形は不定形を呈する。埋土は灰黄褐色泥砂を主体とする。土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器、瓦類が出土した。室町時代後期の遺構である。

柱穴89 南東部で検出した。径約0.4m、深さ約0.2m。柱痕跡は認められない。埋土は褐灰色泥砂を主体とする。土師器・須恵器・輸入陶磁器が出土した。室町時代後期の遺構である。

井戸1 北西部で検出した。掘形は径約1.2m、深さ約3.1m。井筒は内径約0.9mの漆喰製である。埋土はにぶい黄褐色泥砂を主体とする。瓦器・施釉陶器・染付、瓦類が出土した。江戸時代の遺構である。

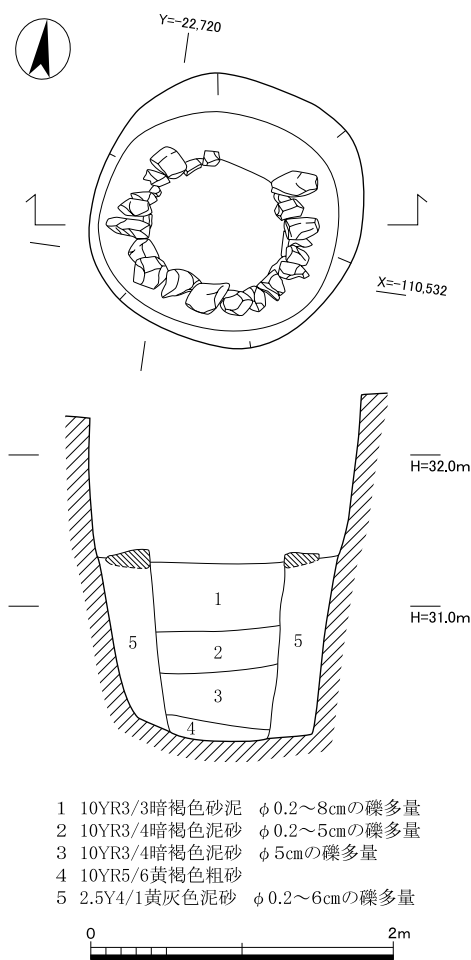


図13 井戸2実測図(1:50)

井戸2(図13、図版8) 南西部で検出した。掘形は径約1.8m、深さ約3.4m。井筒は内径約0.9mの石組みである。埋土は暗褐色砂泥・黄灰色泥砂を主体とする。瓦器・施釉陶器・染付、瓦類が出土した。江戸時代の遺構である。

井戸3 中央部で検出した。掘形は径約1.7m、深さ約3.3m。井筒は内径約1.1mの石組みである。埋土はにぶい黄褐色泥砂を主体とする。瓦器・施釉陶器・染付、瓦類が出土した。江戸時代の遺構である。

土坑6 南東部で検出した。規模は南北約1.9m、東西1.2m以上、深さ約0.3m。西半部を攪乱により削平される。埋土は暗褐色泥砂を主体とし、焼土を中量含む。土師器・瓦器・施釉陶器・染付、瓦類が出土した。江戸時代の遺構である。

井戸90 南西部で検出した。掘形は径約1.7m以上、深さ0.7m以上。遺構の大半は調査区外南となる。埋土は黒褐色粗砂を主体とする。埋土内から漆喰片が多量に出土した。瓦器・施釉陶器・染付、瓦類が出土した。江戸時代の遺構である。

(4) 2区の遺構

1) 第2面(平安時代中期)の遺構(図版4・9)

井戸168(図14、図版9) 北西部で検出した。掘形は南北約2.1m、東西1.8m以上、深さ約2.2m。西端部は調査区外となる。平面形は方形を呈する縦板組の井戸である。中段から下方に一辺約1.1mに組んだ縦板の痕跡を確認した。埋土は暗灰黄色細砂・黄灰褐色砂泥を主体とする。土師器・須恵器・黒色土器・輸入陶磁器、瓦類が出土した。

柱穴161 南西部で検出した。径約0.5m、深さ約0.5m。柱痕跡は認められなかった。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器が出土した。

柱穴189 北西部で検出した。径約0.5m、深さ約0.2m。柱痕跡は認められなかった。埋土は灰黄褐色泥砂を主体とする。土師器・輸入陶磁器が出土した。

柱穴206 中央部で検出した。径約0.4m、深さ約0.3m。柱痕跡は認められなかった。埋土は褐灰色泥砂を主体とする。炭を少量含む。土師器・須恵器・緑釉陶器、瓦類が出土した。

土坑214 中央部で検出した。規模は南北約0.7m、東西約0.6m、深さ約0.6m。埋土は黒褐色泥砂を主体とする。土師器・輸入陶磁器が出土した。

土坑222 中央部で検出した。規模は南北約1.1m、東西1.1m以上、深さ約0.3m。西半部を後世の遺構により削平される。埋土は褐色泥砂を主体とする。炭を少量含む。土師器・須恵器・輸入陶磁器、瓦類が出土した。

溝135 南西部で検出した。東西2.0m以上、南北0.4m以上、深さ0.4m以上。西部と南部はそれぞれ調査区外にのび、東部は攪乱により失われている。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土坑の北辺部の可能性もある。土師器・須恵器が出土した。

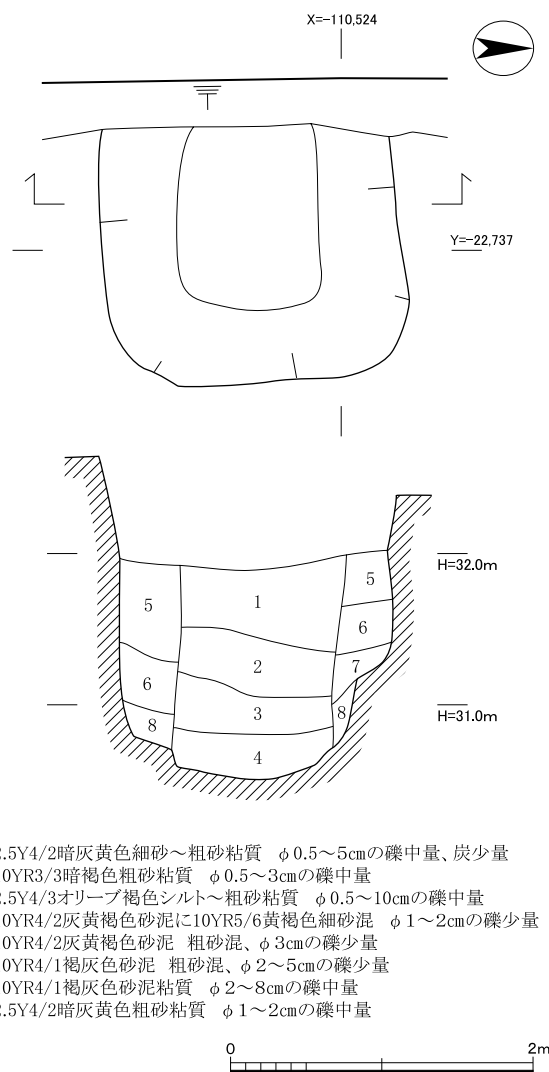


図14 井戸168実測図(1:50)

2) 第1面（平安時代後期から江戸時代）の遺構（図版5・10）

土坑213（図15・16） 中央部で検出した。規模は南北0.6m以上、東西0.4m以上、深さ約0.3m。平面形は楕円形を呈するとみられるが、南東部を後世の井戸に削平される。土坑内底部に径約0.35mの瓦器羽釜を据え付ける。羽釜の鏝部分を意図的に打ち欠いている。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。須恵器・瓦器が出土した。鎌倉時代の遺構である。

土坑172 北西部で検出した。規模は南北2.8m以上、東西0.8m以上、深さ1.5m以上。平面形は不明で、壁はなだらかに下がる。遺構の大半は調査区外西となる。埋土はオリブ褐色粗砂・暗オリブ褐色粗砂などを主体とする。大型の廃棄土坑とみられる。土師器皿・須恵器・瓦器・施釉陶器・輸入陶磁器、瓦類が出土した。室町時代前期の遺構である。

土坑215 中央部で検出した。規模は南北約1.5m、東西約1.5m、深さ約0.7m。平面形は方形を呈する。埋土は暗オリブ褐色砂泥を主体とする。土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器、瓦類が出土した。室町時代前期の遺構である。

井戸140（図17、図版10） 南西部で検出した。掘形は径約2.0m、深さ約3.0m。中段に段があり、それ以下は径約1.2mと狭くなる。内部の構造は不明である。埋土は灰黄褐色砂泥を主体とする。炭を少量含む。土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器とともに瓦・塼が出土した。室町時代後期の遺構である。

柱列3（図18） 北東部で検出した南北方向の柱列である。北から柱穴223・212・192の3基が並ぶ。径0.3～0.4m、深さ0.2～0.4m。柱間は約2.0m。埋土は暗オリブ褐色細砂・暗灰黄色細砂を主体とする。土師器が出土した。室町時代後期の遺構である。

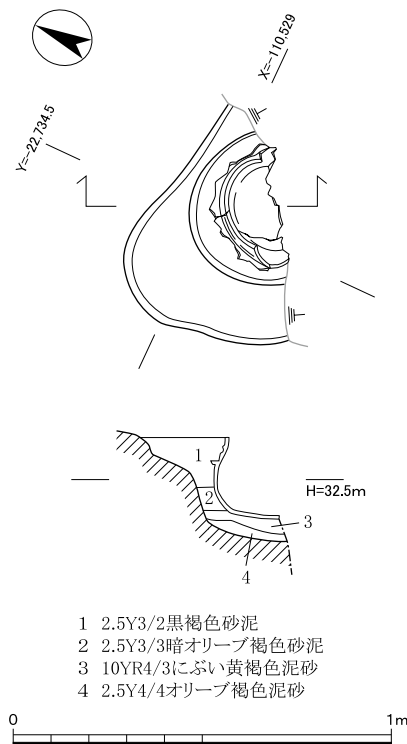


図15 土坑213実測図（1：20）

土坑201 北東部で検出した。規模は南北約1.2m、東西0.6m以上、深さ約0.3m。東半部を攪乱により削平される。埋土は黒褐色泥砂を主体とする。炭を少量含む。土師器・瓦器・焼締陶器が出土した。室町時代後期の遺構である。

土坑150 北西部で検出した。規模は南北約0.6m、東西約0.5m、深さ約0.1m。平面形は楕円形を



図16 土坑213瓦器羽釜出土状況（北西から）

呈する。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。炭を多量に含む。土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。金属滓が付着した土師器皿も出土している。室町時代後期の遺構である。

土坑155 南西部で検出した。東側は調査区外に延びる。規模は南北約1.9m、東西1.2m以上、深さ約0.1m。平面形は方形を呈するとみられる。埋土は黒褐色シルトを主体とする。炭を少量含む。土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。金属滓が付着した土師器皿も出土している。室町時代後期の遺構である。

土坑190 北西部で検出した。規模は南北約1.1m、東西約1.1m、深さ約0.3m。土坑150に北西部を削平される。平面形は方形を呈する。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。炭を少量含む。土師器・瓦器、土製品取鍋、有孔埴とともに金属滓が付着した土師器皿も出土している。室町時代後期の遺構である。

土坑200 中央部で検出した。規模は南北約1.5m、東西約1.5m、深さ約0.3m。南東部を井戸209に削平される。平面形は方形を呈する。埋土は黒褐色

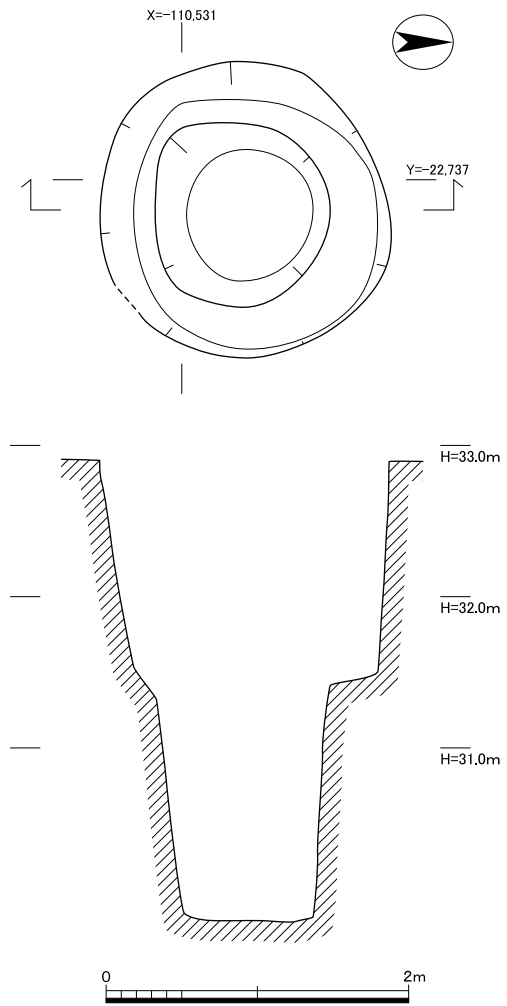
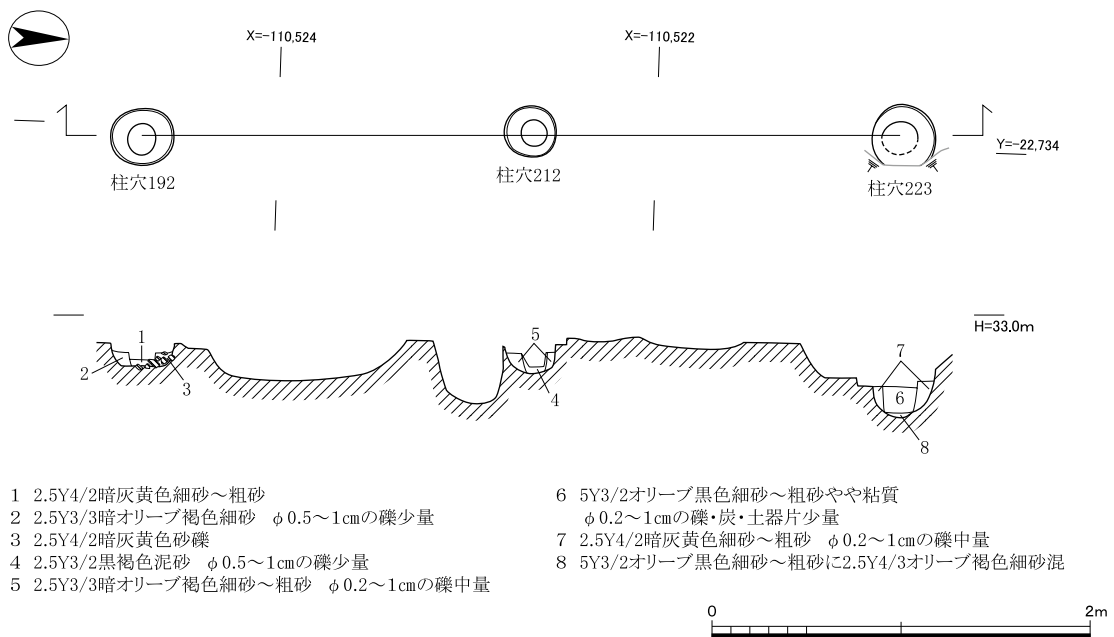


図17 井戸140実測図 (1 : 50)



- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 2.5Y4/2暗灰黄色細砂～粗砂 | 6 5Y3/2オリブ黒色細砂～粗砂やや粘質 |
| 2 2.5Y3/3暗オリブ褐色細砂 φ0.5～1cmの礫少量 | φ0.2～1cmの礫・炭・土器片少量 |
| 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 | 7 2.5Y4/2暗灰黄色細砂～粗砂 φ0.2～1cmの礫中量 |
| 4 2.5Y3/2黒褐色泥砂 φ0.5～1cmの礫少量 | 8 5Y3/2オリブ黒色細砂～粗砂に2.5Y4/3オリブ褐色細砂混 |
| 5 2.5Y3/3暗オリブ褐色細砂～粗砂 φ0.2～1cmの礫中量 | |

図18 柱列3実測図 (1 : 40)

色泥砂を主体とする。炭を少量含む。土師器皿・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器、瓦類、石鍋が出土した。室町時代後期の遺構である。

井戸142 南西部で検出した。掘形は径約1.2m、深さ約2.7m。埋土は黒褐色細砂を主体とする。炭を少量含む。埋土内からは漆喰片が多量に出土した。土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・染付、土製品が出土した。江戸時代の遺構である。

井戸153 北西部で検出した。掘形は径約1.2m、深さ約2.5m。埋土はにぶい黄褐色細砂を主体とする。埋土内からは漆喰片が多量に出土した。施釉陶器・染付が出土した。江戸時代の遺構である。

井戸209 南東部で検出した。掘形は径約1.5m、深さ3.3m以上。井筒は内径約1.1mの漆喰製である。埋土は黒褐色細砂を主体とする。施釉陶器・染付、土製品が出土した。江戸時代の遺構である。

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表3)

遺物は、整理コンテナに27箱出土した。時期別にみると、平安時代のものが多い。次いで鎌倉時代・室町時代・江戸時代のものがある。遺物種類では、土器・陶磁器類が多くを占め、瓦類は少ない。

平安時代の遺物は、井戸・柱穴・土坑などから、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦器・輸入陶磁器、瓦類などが出土した。

鎌倉時代の遺物は、柱穴・土坑などから、土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器などが出土した。

室町時代の遺物は、井戸・柱穴・土坑などから、土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器、土製品、瓦類などが出土した。瓦類には埴が含まれている。

江戸時代の遺物は、井戸・柱穴・土坑などから、土師器・施釉陶器・焼締陶器・染付、土製品、瓦類などが出土した。

その他の遺物には、石製品・金属製品がある。石製品には、石製羽釜・石鍋・硯がある。金属製品には、釘があるが遺存状態が悪いため図示できなかった。銭貨には、寛永通寶がある。

遺物は種類ごとに分け、時代の古い順から記述する。個々の土器類・土製品の詳細については、観察表(表4)に掲載した。

なお、出土遺物の時期は、平安京・京都I期～XIV期編年¹⁾に準拠した。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代中期	土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類		土師器14点、緑釉陶器1点、輸入白磁1点、瓦類3点		
平安時代後期～室町時代前期	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品		土師器10点、瓦器1点、石製品1点		
室町時代後期	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品		土師器12点、瓦器1点、輸入白磁1点、瓦類3点、鑄造関連分析試料36点		
江戸時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、銭貨、金属製品		土師器1点、土製品3点、瓦類2点、石製品1点		
合計		31箱	91点(4箱)	0箱	27箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。

(2) 土器類・土製品 (図19～22、図版11、表4)

平安時代中期 (図19、図版11)

井戸120出土土器 (1～7) 土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器が出土した。京都IV期古～中段階に属する。1～6は土師器皿である。口縁の形態により皿Aと皿Nに分類できる。1～4はいわゆる「て」の字状口縁の皿Aで、口径10.2～10.7cm、器高1.1～1.8cmある。5・6は直線状の口縁部に2段のナデを施す皿Nで、口径14.4cm、器高2.5cmある。7は把手付きの土師器鍋である。下半部を欠損する。体部は緩やかに内湾し、短い口縁部は外反する。肩部に板状の把手を2箇所につける。内面はヨコハケのちナデ。胎土は砂粒を多く含み、橙色を呈する。外面には煤が付着する。

井戸168出土土器 (8～12) 土師器・須恵器・黒色土器・輸入陶磁器が出土した。京都IV期中段階に属する。8～11は土師器皿である。口縁の形態により皿Aと皿Nに分類できる。8・9はいわゆる「て」の字状口縁の皿Aで、口径9.0・9.1cm、器高1.5～1.6cmある。10・11は直線状の口縁部に2段のナデを施す皿Nで、口径13.8・15.0cm、器高2.7・2.9cmある。12は中国製の白磁皿である。口径10.4cm、器高3.1cm、底部5.0cm。高台部を含む外面には釉が及ばない部分がある。

柱穴32出土土器 (13～15) 土師器・須恵器が出土した。京都IV期に属する。13～15は土師器皿である。口縁の形態により皿Aと皿Nに分類できる。13・14はいわゆる「て」の字状口縁の皿Aで、口径9.1・9.6cm、器高1.2・1.5cmある。15は直線状の口縁部に2段のナデを施す皿Nで、口径14.3cm、器高2.7cmある。

平安時代後期から室町時代前期 (図20、図版11)

土坑103出土土器 (16～21) 土師器・須恵器・輸入陶磁器が出土した。京都V期中段階に属する。16～21は土師器皿である。口縁部に2段のナデを施す。小型皿と大型皿に分類できる。16～19は皿N小で、口径9.0～9.2cm、器高1.6～1.8cmある。20・21は皿N大で、口径14.0・14.8cm、器高2.6・2.8cmある。

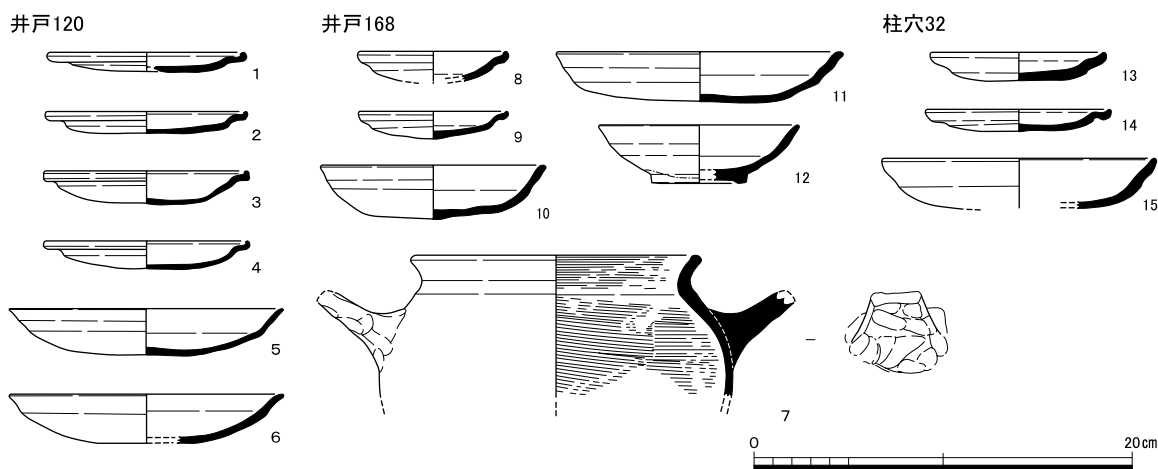


図19 井戸120・168、柱穴32出土土器実測図 (1:4)

土坑35出土土器 (22) 土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。京都V期～VI期に属する。22は土師器皿N小で、口径8.0cm、器高1.3cmある。口縁部に2段のナデを施す。

土坑15出土土器 (23・24) 土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。京都VI期に属する。23・24は土師器皿である。口縁部に2段のナデを施す。小型皿と大型皿に分類できる。23は皿N小で口径9.0cm、器高1.3cmある。24は皿N大で、口径12.5cm、器高2.4cmある。

土坑213出土土器 (25) 25は瓦器羽釜である。口径25.6cm、器高21.4cm。丸底気味の底部から、体部は内湾して立ち上がる。鐙は水平に突出するが端部を打ち欠かされている。口縁部外面に2段の段を付ける。外面はオサエ、内面は目の細かいハケで横方向に調整する。口縁端部・鐙は横方向のナデで仕上げる。胎土は密で灰色、外面は暗灰色を呈する。土坑底部に据え付けられていた。鎌倉時代前期の遺物である。

土坑10出土土器 (26) 土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。京都VII期～VIII期に属する。26は白色系の土師器皿Shで、口径6.3cm、器高1.9cmある。底部を内側上方に押し上げるいわゆるヘソ皿である。

室町時代後期 (図21、図版11)

井戸140出土土器 (27～30) 土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器が出土した。京都IX期～X期に属する。27・28は白色系の土師器皿S大で、口径10.9・12.9cm、器高2.1cmある。30は瓦器羽釜である。口径22.0cmあり、体部は直線的に上方に立ち上がり、鐙は短く水平に突出する。外面はオサエ、内面は板によるヨコナデ。胎土は密で灰白色、外面は暗灰色を呈する。29は中国製の白磁皿である。口径10.3cm、器高2.7cm。釉は底部外面まで口縁部を除くほぼ全面に施される。内面底部に段をもつ。

土坑155出土土器・土製品 (31～35) 土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器とともに金属滓が付着した土師器皿 (付章参照) が出土した。京都IX期～X期に属する。31～34は土師器皿である。小型皿と大型皿に分類できる。31は赤色系の皿N小で、口径7.5cm、器高1.6cmある。32～34は白色系の皿N大で、口径14.6～16.9cm、器高2.5～3.1cmある。

35は緑釉陶器の水滴状の珠である。高さ2.8cm、最大径2.1cm。先端付近に径1.5mmの穿孔がある。

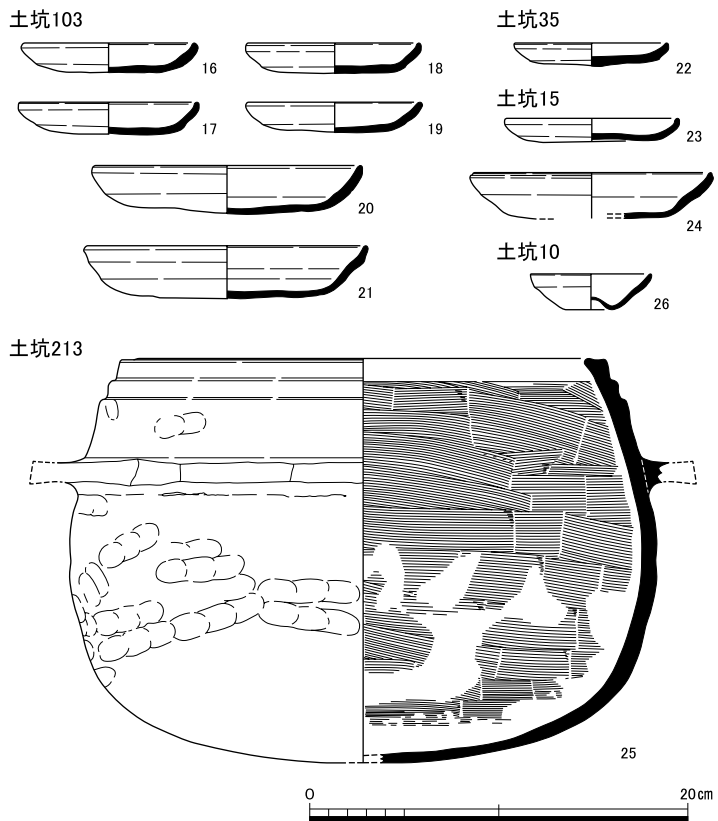


図20 土坑10・15・35・103・213出土土器実測図 (1:4)

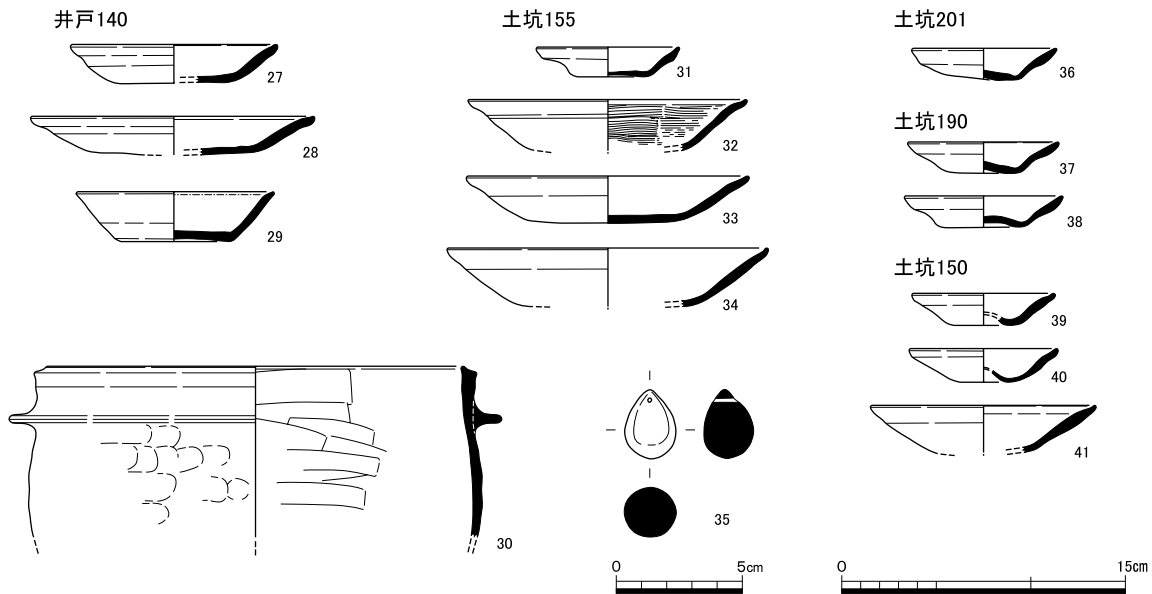


図21 土坑150・155・190・201、井戸140出土土器・土製品実測図（1：4、35のみ1：3）

胎土は緻密で、灰色を呈する。全体に明緑灰色の釉を施す。平安時代の遺物である。

土坑201出土土器（36） 土師器・瓦器・焼締陶器が出土した。京都IX期に属する。36は赤色系の土師器皿N小で、口径7.6cm、器高1.7cmある。

土坑190出土土器・土製品（37・38） 土師器・瓦器、土製品取鍋、有孔罇とともに金属滓が付着した土師器皿（付章参照）が出土した。京都IX期～X期に属する。37・38は赤色系の土師器皿N大で、口径7.8・8.3cm、器高1.7cmある。

土坑150出土土器（39～41） 土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器とともに金属滓が付着した土師器皿（付章参照）が出土した。京都IX期～X期に属する。39～41は土師器皿である。39・40は白色系の皿Shで、口径7.4・7.8cm、器高1.7・1.8cmある。底部を内側上方に押し上げるいわゆるヘソ皿である。41は白色系の皿S大で、口径11.8cm、器高2.4cmある。

江戸時代（図22）

井戸142出土土器・土製品（42～44） 土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・染付・土製品が出土した。京都XIII期～XIV期に属する。42は赤色系の土師器皿Nrで、口径4.6cm、器高1.4cmある。

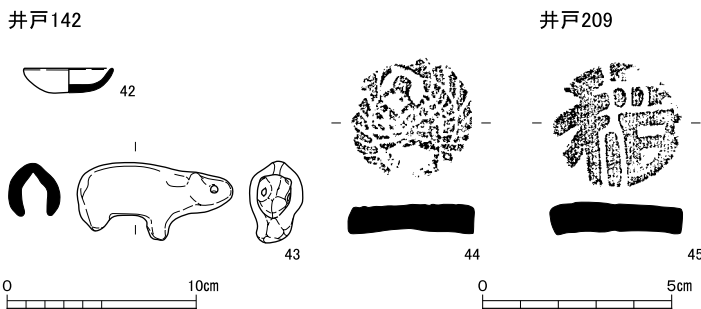


図22 井戸142・209出土土器・土製品拓影及び実測図（42・43は1：4、44・45は1：2）

43は土人形の牛である。成形手法は型あわせで、体部は中空である。44は土製品の泥面子で、翼を広げた鶴文である。

井戸209出土土器・土製品（45） 施釉陶器・染付・土製品が出土した。45は土製品の泥面子で「稲」の文字銘である。江戸時代後半の遺物である。

(3) 瓦類 (図23、図版11)

平安時代

軒丸瓦 (瓦1) 単弁6弁蓮華文軒丸瓦である。平坦な中房で、蓮子は1+4である。蓮弁は子葉あり。間弁はバチ形である。外区は小振りな珠文が粗く巡る。周縁は素文である。瓦当部の成形は、一本造り技法である。瓦当部側面上半はタテヘラケズリ後にナデ、下半はヨコケズリ。裏面は布目がわずかに残り、外周ヨコケズリを施す。胎土は細砂を含み灰白色、表面は灰色、やや軟質である。時期は平安時代中期である。池田瓦窯産である。近現代盛土層から出土した。

軒平瓦 (瓦2) 唐草文軒平瓦である。子葉は大きく巻き込み、先端は丸くなる。瓦当部凹面に布目。顎部凸面はヨコケズリ、裏面ヨコナデ。側面ヨコケズリ。段顎。胎土は細砂を含み灰色、表面は灰色、焼成は焼き締まる。時期は平安時代中期から後期である。森ヶ東瓦窯産である。土坑72から出土した。

軒平瓦 (瓦3) 蓮華文軒平瓦である。複弁の蓮弁を放射状に配する。左端が単弁である。弁は互いに接し、蓮弁間に丸みをもつ間弁がみられる。瓦当部凹面に布目。顎部凸面はヨコケズリ、裏面ヨコケズリ。側面ヨコケズリ。段顎。胎土は細砂を含み灰白色、表面は灰色、焼成は焼き締まる。時期は平安時代中期である。近現代盛土層から出土した。堀河院跡で出土例がある²⁾。

室町時代

軒丸瓦 (瓦4) 左巻き巴文軒丸瓦である。外区は小振りな珠文が密に巡る。瓦当部側面ヨコナデ、裏面ナデ。胎土は細砂を含み灰色、表面は黒灰色、焼成は焼き締まる。時期は室町時代である。井戸140から出土した。

丸瓦 (瓦5) 玉縁部と下方の一部を欠損する。凸面はタテケズリのちタテナデ。凹面は端部に面取り、糸切り痕。上方1/3の箇所径約1.5cmの穿孔がある。胎土は細砂を含み灰色、表面は灰色、焼成は焼き締まる。時期は室町時代である。井戸140から出土した。

塼 (瓦6) 上下面、側面にナデを施す。隅付近に径約1.5cmの穿孔がある。胎土は細砂を含み灰色、表面は黒灰色、焼成は焼き締まる。時期は室町時代である。井戸140から出土した。

江戸時代

軒平瓦 (瓦7) 唐草文軒平瓦である。中心部から左半を欠く。瓦当部凹面はケズリのちヨコナデ、顎裏面はヨコナデ。瓦当成形は顎貼り付けである。瓦当面には雲母が多量に付着する。胎土は細砂を含みにぶい黄橙色。焼成は軟質。時期は江戸時代である。井戸209から出土した。

軒平瓦 (瓦8) 唐草文軒平瓦である。中心文は先端が2つに分かれた2葉文の下に珠点を配する。左右に均整唐草文。唐草の巻きは強い。周縁幅はやや広い。調整は上外区外縁に面取りを施し、顎裏面はヨコナデを施す。胎土は細砂を含み灰白色、表面は黒灰色、焼成は焼き締まる。時期は江戸時代中期である。井戸142から出土した。

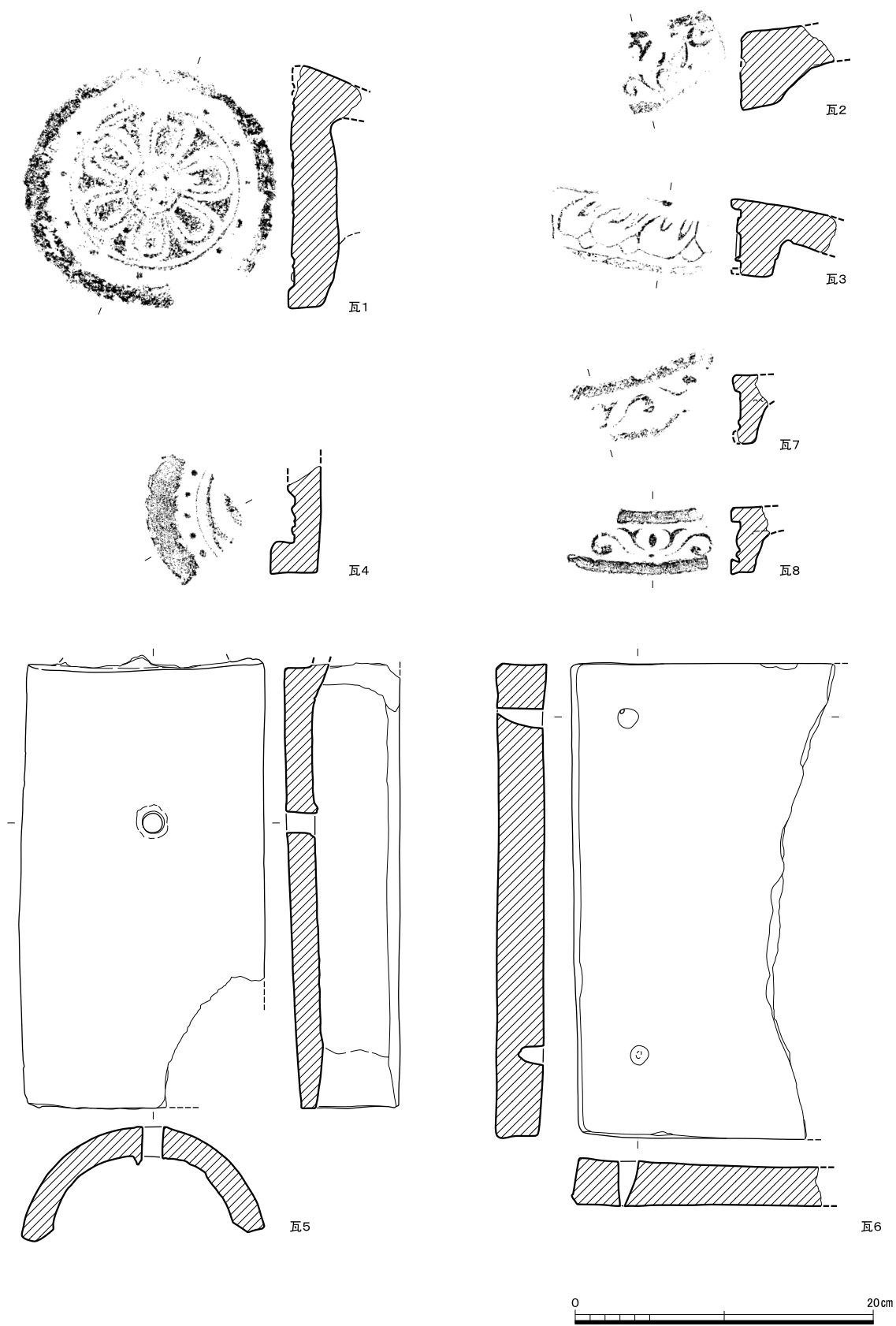


図23 瓦類拓影及び実測図 (1 : 4)

表4 土器類・土製品観察表

番号	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土色調	備考
1	土師器	皿A	井戸120	10.2	1.1		100	7.5YR7/4にぶい 橙色	
2	土師器	皿A	井戸120	10.6	1.2		98	10YR8/2灰白色	
3	土師器	皿A	井戸120	10.6	1.8		98	10YR7/3にぶい 黄橙色	
4	土師器	皿A	井戸120	10.7	1.5		98	10YR7/4にぶい 黄橙色	
5	土師器	皿N	井戸120	14.4	2.5		98	10YR8/3浅黄橙色	
6	土師器	皿N	井戸120	14.4	2.5		50	10YR6/2灰黄褐色	
7	土師器	鍋	井戸120	15.5	(7.6)		25	5YR6/6橙色	把手付き
8	土師器	皿A	井戸168	9.0	(1.6)		33	7.5YR7/6橙色	
9	土師器	皿A	井戸168	9.1	1.5		50	2.5Y8/2灰白色	
10	土師器	皿N	井戸168	13.8	2.9		25	10YR7/3にぶい 黄橙色	
11	土師器	皿N	井戸168	15.0	2.7		50	10YR8/4浅黄橙色	
12	輸入白磁	皿	井戸168	10.4	3.1	5.0	25	釉:7.5Y6/2灰オリーブ色 胎土:N8/0灰白色	
13	土師器	皿A	柱穴32	9.1	1.5		25	10YR8/2灰白色	
14	土師器	皿A	柱穴32	9.6	1.2		90	2.5Y8/2灰白色	
15	土師器	皿N	柱穴32	14.3	2.7		12	7.5YR7/4にぶい 橙色	
16	土師器	皿N小	土坑103	9.0	1.6		100	7.5YR7/4にぶい 橙色	
17	土師器	皿N小	土坑103	9.1	1.8		100	7.5YR7/4にぶい 橙色	
18	土師器	皿N小	土坑103	9.1	1.6		100	7.5YR7/4にぶい 橙色	
19	土師器	皿N小	土坑103	9.2	1.6		100	7.5YR7/4にぶい 橙色	
20	土師器	皿N大	土坑103	14.0	2.6		90	7.5YR8/6浅黄橙色	
21	土師器	皿N大	土坑103	14.8	2.8		90	7.5YR7/4にぶい 橙色	
22	土師器	皿N小	土坑35	8.0	1.3		50	7.5YR7/4にぶい 橙色	
23	土師器	皿N小	土坑15	9.0	1.3		90	10YR8/3浅黄橙色	
24	土師器	皿N大	土坑15	12.5	2.4		33	10YR7/3にぶい 黄橙色	
25	瓦器	羽釜	土坑213	25.6	(21.4)		50	N3/0暗灰色	
26	土師器	皿Sh	土坑10	6.3	1.9		50	10YR7/2にぶい 黄橙色	
27	土師器	皿S大	井戸140	10.9	2.1		25	7.5YR7/4にぶい 橙色	
28	土師器	皿S大	井戸140	12.9	2.1		12	10YR7/3にぶい 黄橙色	
29	輸入白磁	皿	井戸140	10.3	2.7	5.7	33	釉:5Y7/1灰白色 胎土:2.5Y7/1灰白色	
30	瓦器	羽釜	井戸140	22.0	9.0		8	N4/0灰色 5Y8/1灰白色	
31	土師器	皿N小	土坑155	7.5	1.6		98	10YR8/3浅黄橙色	
32	土師器	皿N大	土坑155	14.6	(2.7)		25	10YR8/3浅黄橙色	
33	土師器	皿N大	土坑155	14.8	2.5		25	10YR8/3浅黄橙色	
34	土師器	皿N大	土坑155	16.9	(3.1)		15	10YR8/3浅黄橙色	
35	緑釉陶器	珠	土坑155	縦2.8	横2.1	厚2.0	98	明緑灰色	穿孔あり
36	土師器	皿N小	土坑201	7.6	1.7		100	10YR7/3にぶい 黄橙色	
37	土師器	皿N大	土坑190	7.8	1.7		25	2.5Y8/2灰白色	
38	土師器	皿N大	土坑190	8.3	1.7		25	10YR7/2にぶい 黄橙色	
39	土師器	皿Sh	土坑150	7.4	1.7		25	10YR8/2灰白色	
40	土師器	皿Sh	土坑150	7.8	1.8		50	10YR8/3浅黄橙色	
41	土師器	皿S大	土坑150	11.8	2.4		25	10YR8/3浅黄橙色	
42	土師器	皿Nr	井戸142	4.6	1.4		80	7.5YR7/3にぶい 橙色	
43	土製品	人形	井戸142	縦4.1	横8.2	厚2.8	100	7.5YR6/4にぶい 橙色	牛 中空
44	土製品	泥面子	井戸142	縦3.6	0.8	横3.3	100	7.5YR8/6浅黄橙色	鶴文
45	土製品	泥面子	井戸209	縦3.3	0.9	横3.5	100	7.5YR7/6橙色	「稲」字

5. まとめ (図25)

今回の調査地は、平安京左京五条二坊八町跡にあたり、北を四条大路、東を堀川小路、南を綾小路、西を猪隈小路に囲まれる。室町時代後半には、妙満寺が伽藍を展開し、妙満寺の構え跡に推定されている。

調査地周辺では、これまで実施された発掘調査は少ないが、多くの試掘・立会調査が実施され、各時代の多くの遺構が検出されている。

今回は調査地の中央部分が大きく攪乱されていたが、調査の結果当地の環境や土地利用についての資料を得ることができた。調査成果としては、平安時代から江戸時代の各時代の遺構を検出した。時期別には、平安時代中期、平安時代後期から室町時代前期、室町時代後期、江戸時代の4時期に区分することができ、平安時代中期と室町時代後期に属する時期の遺構が多いことが判明した。

以下、古い時期の順に概要を述べる。

1期 (平安時代中期)

調査地は、八町の西一行北一・二門、西二行北一・二門にあたり、八町の北西隅部と想定される。調査地の東端と西端で、平安時代中期の井戸を検出した。井戸内からは、灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器などが出土していることから、ある程度の高級品を保有できる階層が居住したとみられる。井戸の位置は、ともに四条大路南築地推定位置からの距離が約12mとほぼ同じであり、それぞれ西一行と西二行に位置していることから、それぞれ別の宅地の可能性が考えられる。南東部には東西方向の柱列があるが、建物の復元には至っていない。周辺調査では、この時期の土坑・柱穴が数箇所検出されており、調査地は八町の北西隅部にあたとみられるが、遺構・遺物の量が多いことから、この時期に活発な土地利用がなされていたことが判明した。

2期 (平安時代後期から室町時代前期)

この時期の井戸は検出されておらず、宅地境などは見つからないが、利用状況が変わったとみられる。北東部で、平安時代後期の土器類が多く出土する土坑があり廃棄土坑の可能性もある。南東部に平安時代後期の東西方向の柱列がある。地下式礎石をもつ構造であり、建物の北東部の可能性があるが、建物の復元には至っていない。南西部では、鎌倉時代の瓦器羽釜を底部に据え付けた土坑を検出した。北西部の土坑は、室町時代前期の大型廃棄土坑とみられる。小規模な柱穴からは、この時期の遺物が出土していることから建物の存在が窺われる。2期は、ほかの各期に比べて時間幅が長い設定となり、遺構数が多いが、平安時代後期・鎌倉時代・室町時代前期に3分割すれば、それぞれ遺構数は1・3期には及ばない状況である。

3期 (室町時代後期)

妙満寺が造営された時期にあたる。妙満寺は、応仁・文明の乱(応仁元年：1467～文明9年：1477)後に綾小路東洞院から当地に移転し、伽藍を造営した。天文法華の乱(天文5年：1536)後に一時、堺に移るが、天文11年(1542)に再び当地に戻り、伽藍を再建する。西部に位置する大

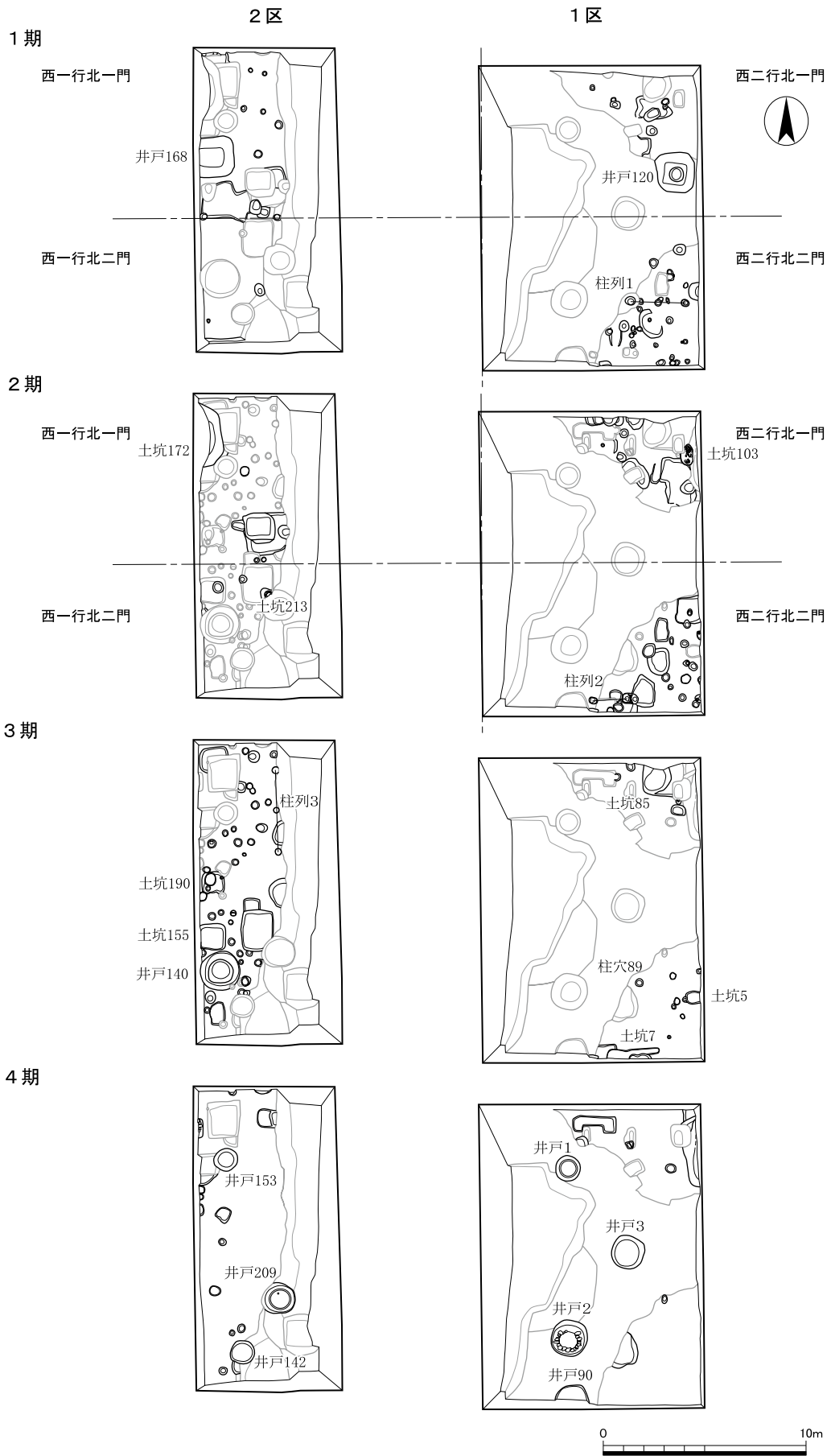


図25 遺構変遷図 (1 : 300)

型の井戸からは、この時期の土師器皿とともに輸入陶磁器や瓦・埴が出土している。埴は寺院の仏堂床などに使用されるもので、妙満寺に関連すると考えられる。さらに西部では、数基の土坑から炭片とともに土製品取鍋、金属滓が付着した土師器皿、有孔埴などが出土している。土製品取鍋・金属滓が付着した土師器皿の滓物質の分析は付章に詳しいが、これらの状況から、この付近で銅製品の鑄造が行われていたと考えられる。妙満寺寺内の具体的な様子を窺うことができる遺物として注目される。北西部には、南北方向の柱列がある。ほかに柱穴が多くあるが、建物の復元には至っていない。寺域の北西隅部にあたとみられ、検出した柱穴はその規模から雑舎などに伴う可能性がある。周辺調査では、この時期の井戸・土坑・柱穴・溝など多くの遺構が検出されており、活発な土地利用が窺える。

4期（江戸時代）

妙満寺は、豊臣秀吉による寺町形成に伴い、天正11年（1583）に寺町二条に移る。妙満寺転出後の当地は、町家域になったとみられる。調査地の全域にこの時期の漆喰や石組の井戸が7基存在する。東部に位置する井戸は、東側の岩上通から10m以内に位置することから、町家内の構造を推測する手掛かりとなる。柱穴を検出しているが、建物の復元には至っていない。周辺調査でも、この時期の土坑・柱穴など多くの遺構が検出されており、井戸の位置や数からは、町家が密集していたことが想定できる。

付章 出土した鑄造関連試料の分析調査

北野信彦（龍谷大学）

1. はじめに

今回の調査で検出した室町時代後期の3基の土坑から取鍋破片1点及び金属滓が付着した土師器皿破片35点が出土している。本報告では、これらの内・縁面に付着したガラス釉化した滓物質に関する分析調査を実施したので、この結果を報告する。

2. 調査対象試料

調査対象試料は、いずれも厚手の取鍋破片や薄手の金属滓が付着した土師器皿破片などの内・縁面に付着したガラス釉化した滓物質の合計36試料である。これらは共伴する土師器編年から、室町時代後期の京都市中における鑄造関連試料群であると考えられている。以下、調査対象試料を述べる。試料56～70：土坑150、試料71・72：土坑155、試料73～91：土坑190。

3. 調査方法

本調査では、滓物質に関する色相や表面状態の観察、非破壊の分析を実施した。以下、調査方法を記す。

3.1 ガラス釉化した滓物質の色相や表面状態の観察

調査対象試料の色相や表面状態は、まず目視観察したのち、(株)スカラ製のDG-3型デジタル顕微鏡を用いて50倍の倍率で観察した。引き続き、一部の代表的な試料については、1,000倍から2,500倍の高倍率観察を、(株)ハイロックス社製のVH-7000S型デジタルマイクロスコープを使用して行った。

3.2 無機元素の定性分析

調査対象試料である滓物質の無機元素の定性分析は、(株)リガクのNiton XL3t-700携帯型のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を調査対象箇所注意深く近接させて大気中で分析した。設定条件は、測定視野は直径8.0mmスポット、管球は対陰極Agtターゲット、管電圧は50kV、大気圧で分析設定時間は100秒である。なお本試料群の滓物質が付着している土師器皿は、いずれも比較的小さい破片資料である。そのため本学の文化財科学研究室設置の据付型蛍光X線分析装置の試料室内で分析することが可能なサイズであるため、土師器皿表面の胎土箇所と内面及び縁面の試料付着箇所のそれぞれの箇所に関する詳細な定性分析を実施し、その比較差で滓物質の無機元素の同定を行った。分析は(株)堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置を使用した。設定条件は、分析時間は600秒、試料室内は真空、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240 μ Aおよび20 μ A、検出強度は200.0～250.0cpsである。

4. 調査結果

各種の観察および分析調査を行った結果、以下のような基礎的データの蓄積を得た。

① 各試料の付着滓物質の色相は、黒色系・赤色系・茶色系・灰色系・淡黄系・白色系、さらには原材料と考えられる銅のメタル状態が反映していると想定される光沢がある茶銅系・この銅がサビ化したと想定される緑青色系など、色相は比較的多岐におよんでいた。

② 本試料群と比較的年代観に近い試料群である清須城下町遺跡でも、鑄造関連遺物である埴埴破片や取鍋破片が一括して多数出土している。これらの表面観察を実施した鈴木・蔭山らは、鑄造関連土器片に付着した滓物質の色相を黒色系滓・赤色系滓・茶色系滓・銅滴付着に分類している。そして、これらの占有率は黒色系滓61%、赤色系滓47%、茶色系滓10%、このうち黒色系滓と赤色系滓は併存する機会が多いため両者の物質には関連性が高いとしている。本試料群と清須城下町遺跡出土試料群との比較検討を実施していないため単純な比較はできないが、本試料群においても黒色系滓と赤色系滓が併存するものが多く、その点では類似した傾向が認められた。

③ 本試料群である滓物質の表面状態を拡大観察した結果、黒色系・灰色系・赤色系滓の試料箇所では、被熱による沸騰泡痕跡が確認された。一方、白色系・淡黄系物質の箇所では、このような沸騰泡痕跡は確認されなかった。また多くの試料では高温被熱に伴うシリカ成分溶融固化に伴う透明感があるガラス釉化物質が被膜付着した状態が観察された。この状況から、本報告では本試料群を「ガラス釉化した滓物質」と呼称している。

④ 金属滓が付着した土師器皿の外面など、各試料の滓物質が付着していない箇所を蛍光X線分析した結果、いずれの試料においても強い鉄 (Fe) のピークとともに、シリカ (Si)、カリウム (K)、チタン (Ti)、微弱なカルシウム (Ca)、マンガン (Mn) などのピークが検出された。このピークの検出状況は、すべての試料でほぼ同様である。そのため、本試料群の土師器皿の胎土は、基本的にはほぼ同質であると理解した。

⑤ ガラス釉化した滓物質箇所を蛍光X線分析した結果、いずれの滓物質ともに鉄 (Fe) と銅 (Cu)、さらにはカルシウム (Ca) の強いピークが検出された。さらに試料によっては、鉄 (Fe) と銅 (Cu)、カルシウム (Ca) の強いピークとともに鉛 (Pb) のピークが同時に検出されるもの、比較的強い鉛 (Pb) とヒ素 (As) が共存して検出されるもの、微弱な鉛 (Pb) とヒ素 (As) のピークが共存して検出されるもの、極めて微弱なヒ素 (As) のピークが検出されるものなどが存在していた。またごくわずかの試料には銅 (Cu) とともに極めて微弱な亜鉛 (Zn) のピークが共存するものもあった。その一方で、本試料群には、青銅滓を示す銅 (Cu)・スズ (Sn)・鉛 (Pb) の3つが共存する試料は見出されなかった。

⑥ いずれの試料においても、鉄 (Fe) のピークは銅 (Cu) のピークとともに強く検出されているが、胎土箇所でも強い鉄 (Fe) の強いピークが検出されている。そのため、銅素材と鉄素材を混和してそれが溶融しているのではなく、基本的には純銅もしくは鉛添加の銅の什器生産に伴う滓であると理解した。また、一部の試料で微量に検出されるヒ素 (As) は、鑄造過程において意識

的に添加したものではなく、基本的に素材である銅鉱石自体に含まれていたものであろう。

⑦ 本試料群のうち、付着占有率が高い黒色系・赤色系・灰色系の滓箇所では、特に銅 (Cu) のピークが強く、この点では原材料と考えられる銅のメタル状態を反映した光沢がある茶銅系滓箇所や、この銅滴素材がサビ化したと想定される滓箇所と類似した分析結果であった。その一方で、白色系や淡黄系箇所ではカルシウム (Ca) もしくは鉛 (Pb) のピークがやや高い傾向が認められた。以上の点から、同じ取鍋破片や薄手の金属滓が付着した土師器皿破片などの内面や縁面に付着したガラス釉化した滓物質であっても、銅に意識的に混和したと考えられる鉛 (Pb) や、滓物質には意識的に高温沸騰の消泡材料として添加した可能性がある石灰などのカルシウム (Ca) は、常に均一に溶解混合した状態ではなく、金属物質の偏在化が存在したようである。

⑧ 本試料群は、薄手の金属滓が付着した土師器皿破片と厚手の取鍋破片といった異なる器種の鑄造容器に付着していた滴物質であるが、双方の分析結果は類似したものであった。そのため、これらの土器資料は一連の銅関連の器種生産の鑄造工程で使用された一連資料であろう。

参考文献

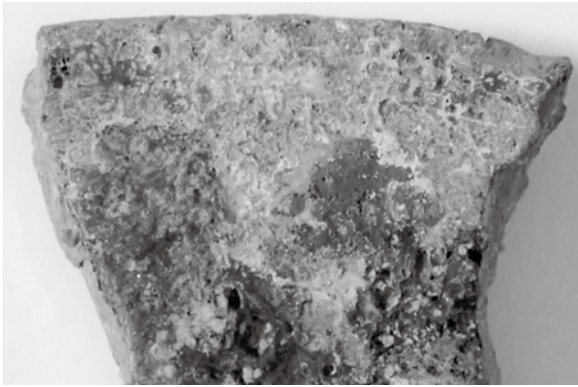
杉山洋 (2002) 「飛鳥池遺跡の性格をめぐって」『文化財論叢 Ⅲ 奈良文化財研究所創立50周年記念論文集』、p157-170、吉川弘文館

杉山洋 (1990) 「奈良時代の金属器生産 - 銅器生産遺跡を通して見た考古学的素描 -」『仏教芸術 第190号』、p47-72、東京文化財研究所

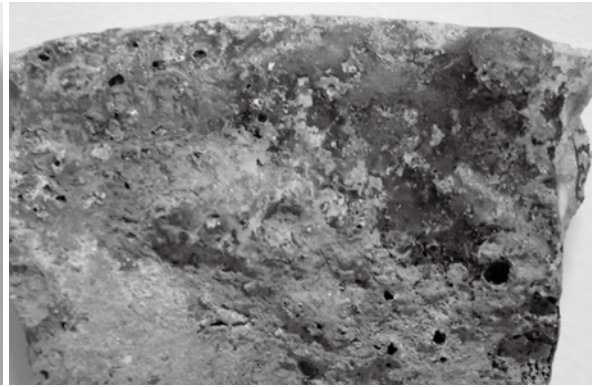
京都市埋蔵文化財研究所 (2005) 『平安京左京八条三坊三町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005 - 10』

鈴木正貴・蔭山誠一 (2004) 「清須城下町における銅製品生産 - 愛知県における金属器生産 (7)」『研究紀要 第5号』、p.47-62、愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

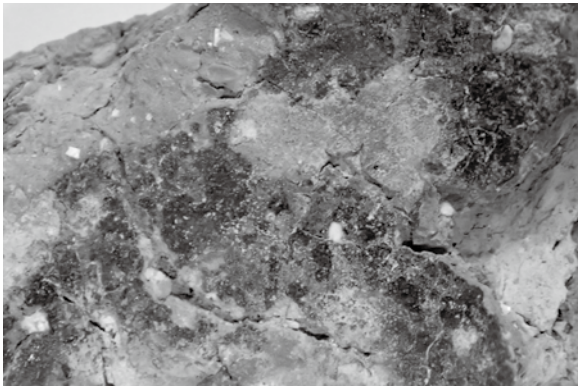
大阪文化財協会 (1998) 『住友銅吹所跡発掘調査報告:住友銀行鰻谷新システムセンター建設に伴う発掘調査報告書』、大阪文化財協会



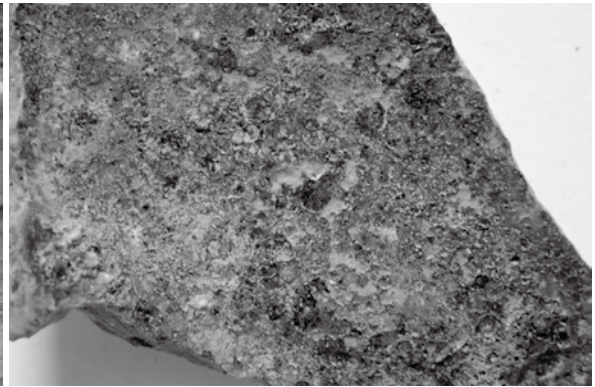
試料 57



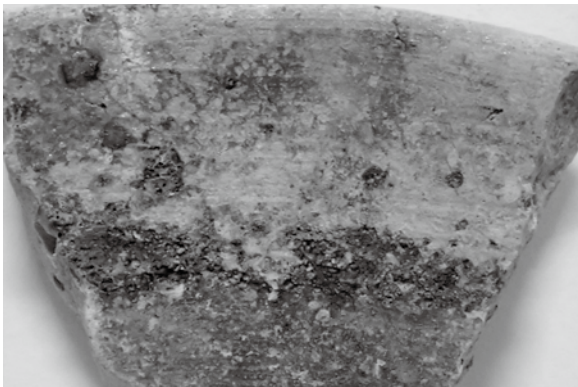
試料 72



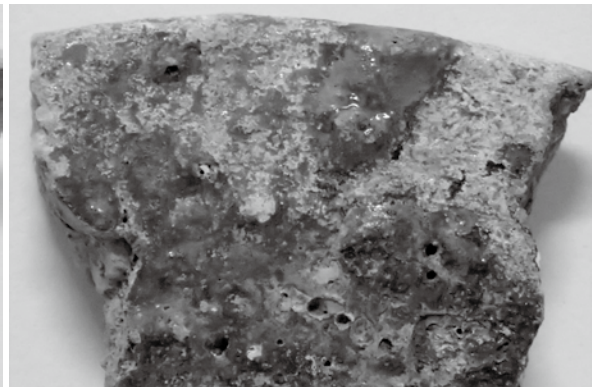
試料 73



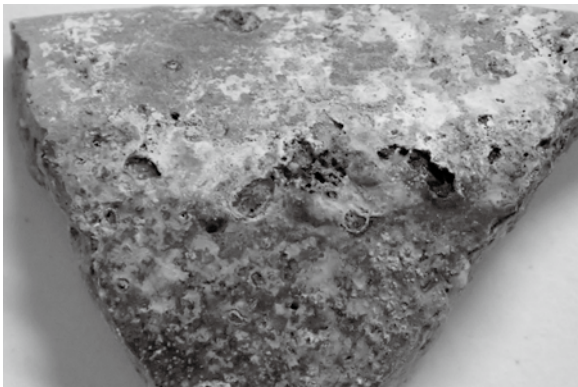
試料 78



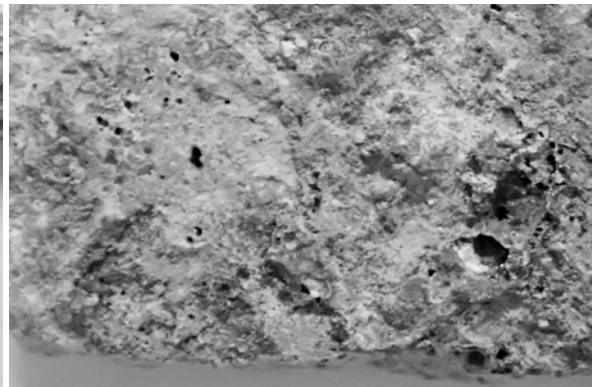
試料 79



試料 81

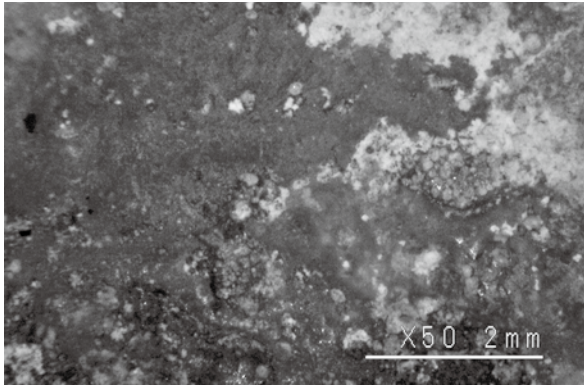


試料 84

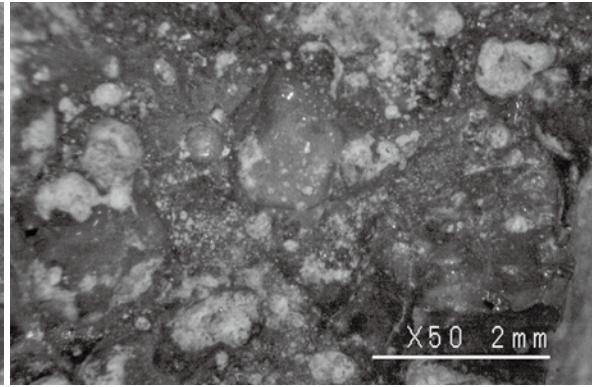


試料 87

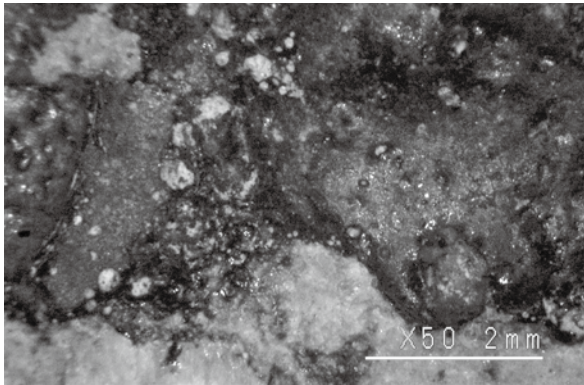
図26 滴物質の付着状態写真



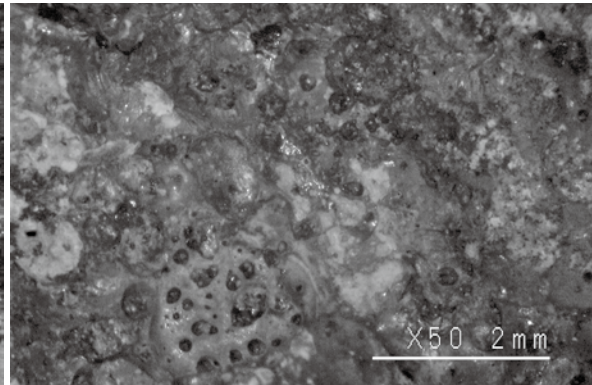
試料57 黒色系・赤色系滓箇所



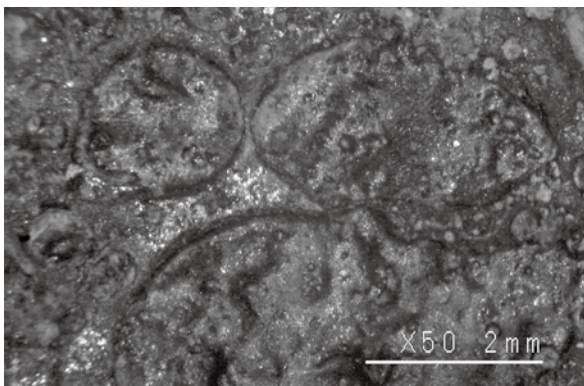
試料57 黒・赤・茶色系滓箇所



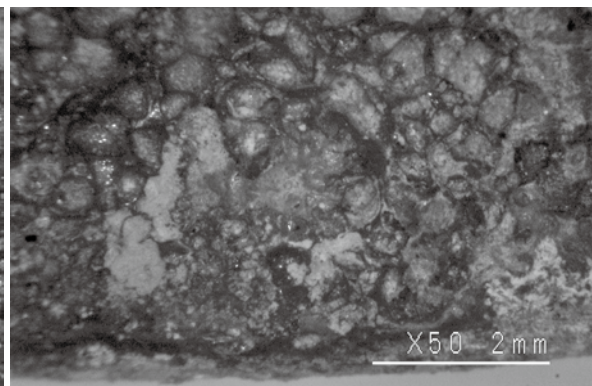
試料59 黒・灰色系滓箇所



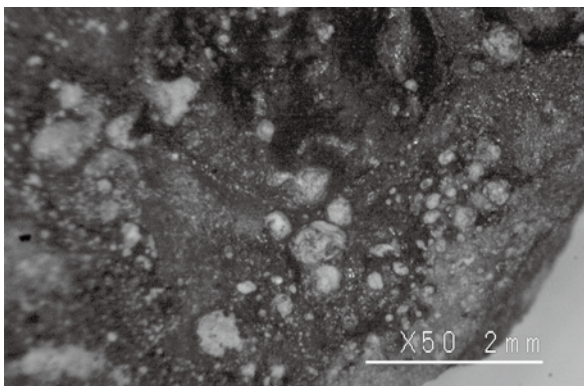
試料60 赤・黒・淡黄・白色系滓箇所



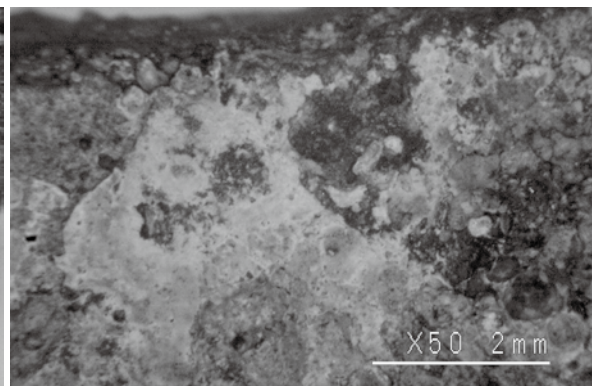
試料62 黒色系滓箇所の沸騰痕跡



試料63 黒・赤色系滓箇所の沸騰痕跡

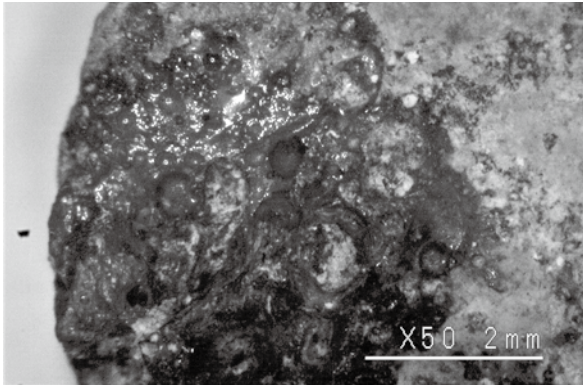


試料65 黒色系滓箇所の沸騰痕跡

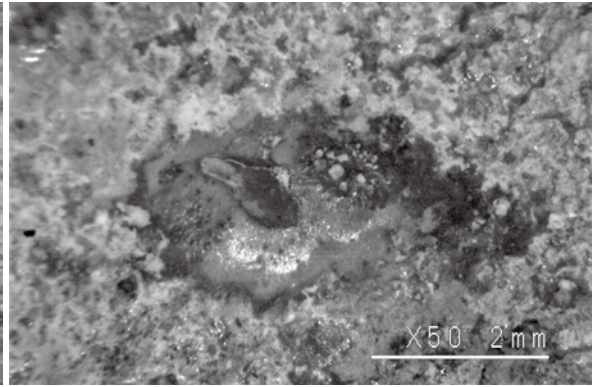


試料67 淡黄系滓箇所

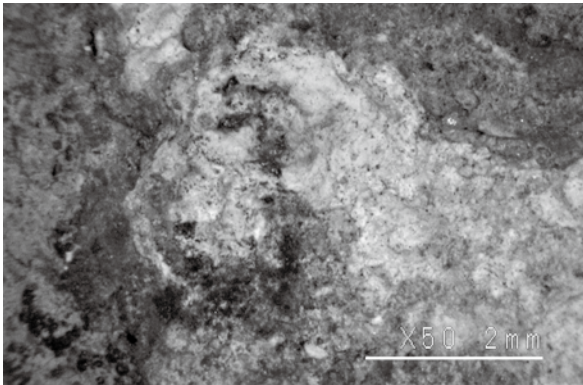
図27 滴箇所拡大写真1



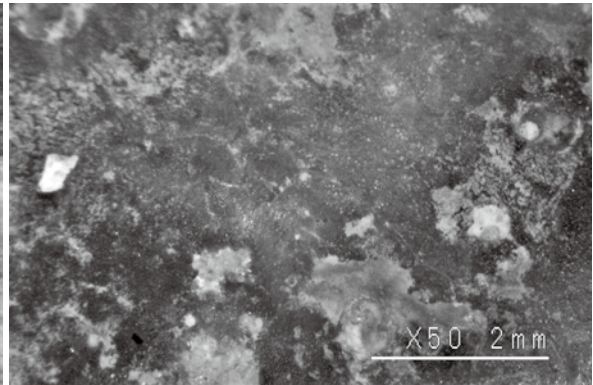
試料84 黒・茶・淡黄系滓箇所



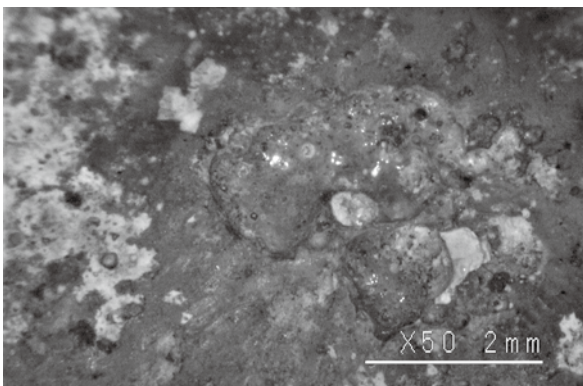
試料70 茶銅・黒色系滓箇所



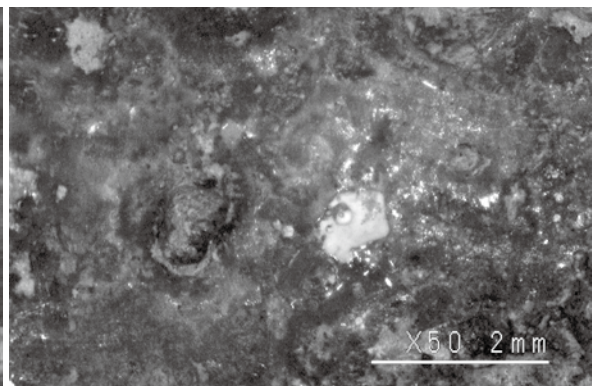
試料71 緑青色滓箇所



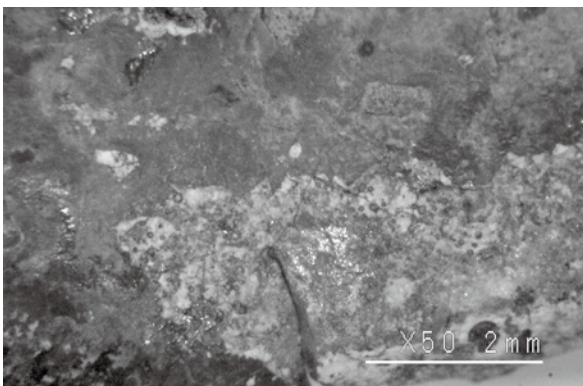
試料72 赤・黒・白・淡茶滓箇所



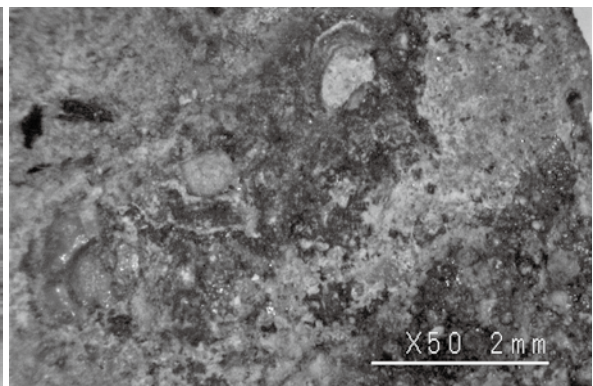
試料75 赤・白色系滴箇所



試料81 黒・白・茶・茶銅系滴箇所

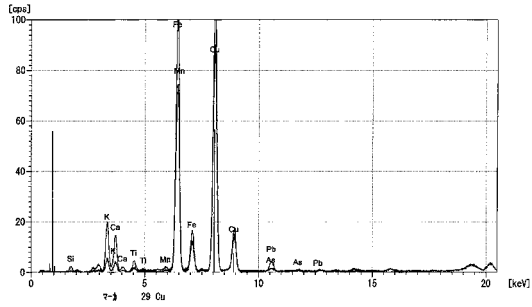


試料83 赤・銅茶色系滓箇所

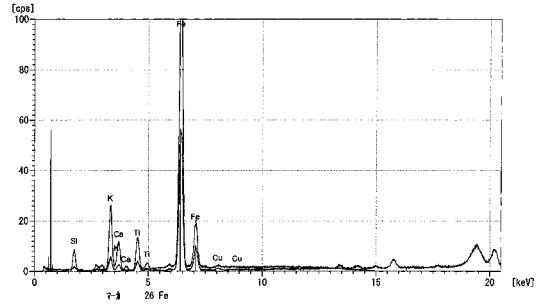


試料84 緑青銅滴箇所

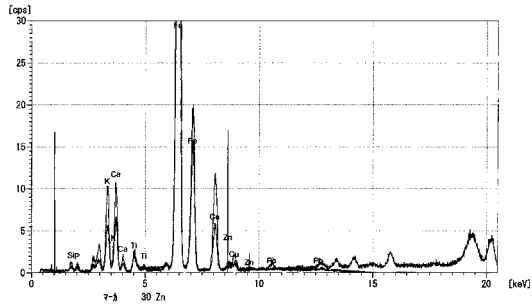
図28 滴箇所拡大写真2



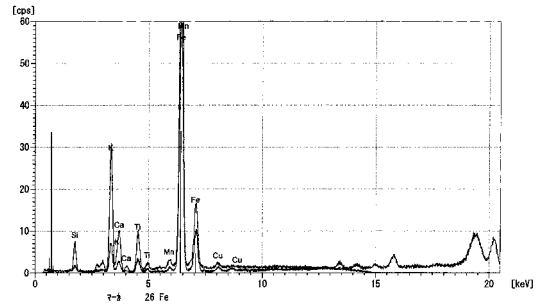
試料57 滴物質



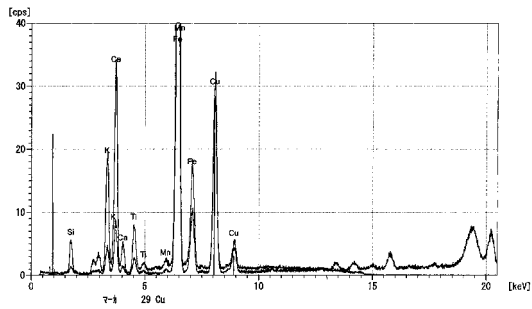
試料57 胎土



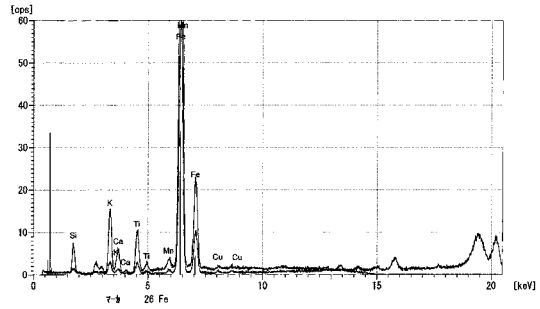
試料59 滴物質



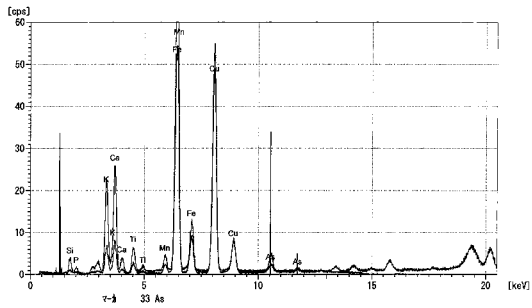
試料59 胎土



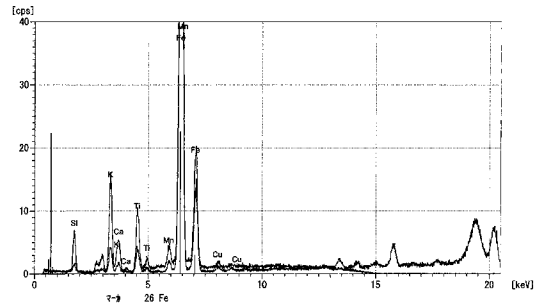
試料60 滴物質



試料60 胎土

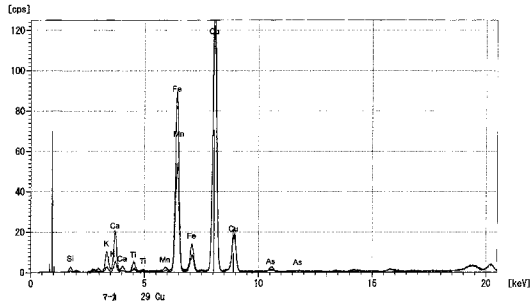


試料61 滴物質

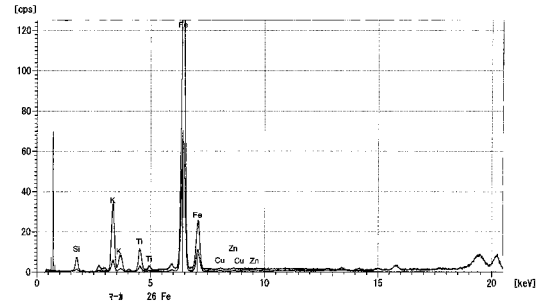


試料61 胎土

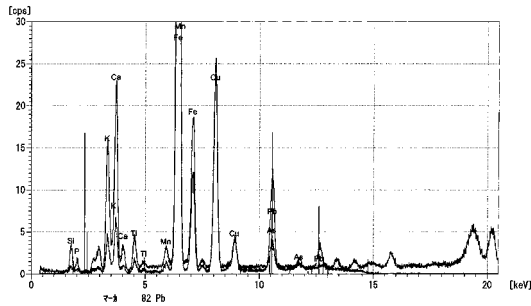
図29 滴物質・胎土の蛍光X線分析結果1



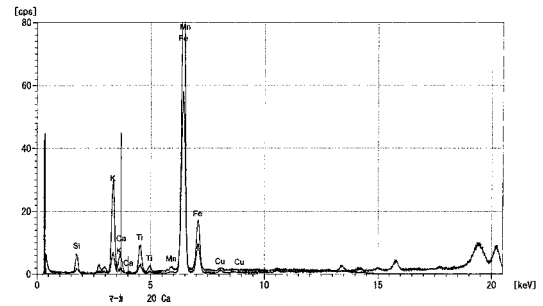
試料 65 滴物質



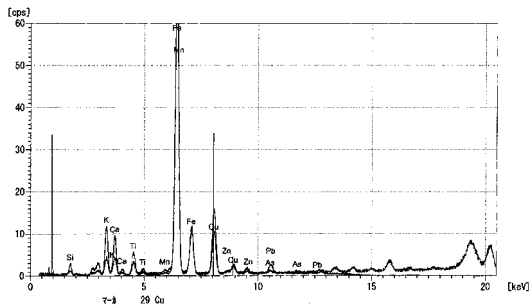
試料 65 胎土



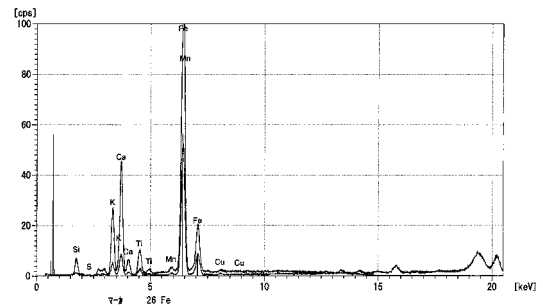
試料 67 滴物質



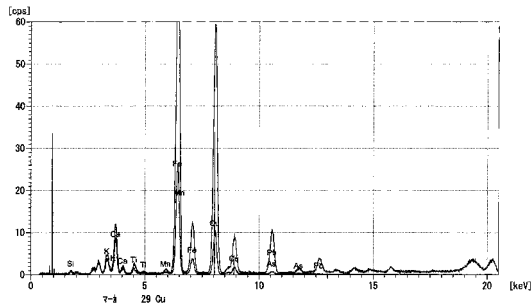
試料 67 胎土



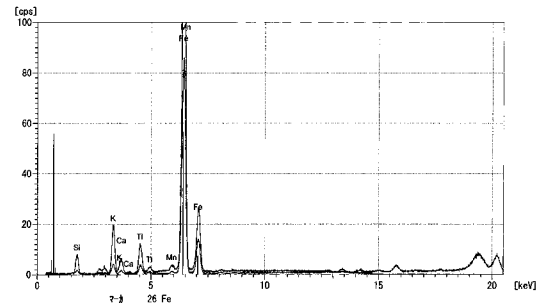
試料 73 滴物質



試料 73 胎土



試料 76 滴物質



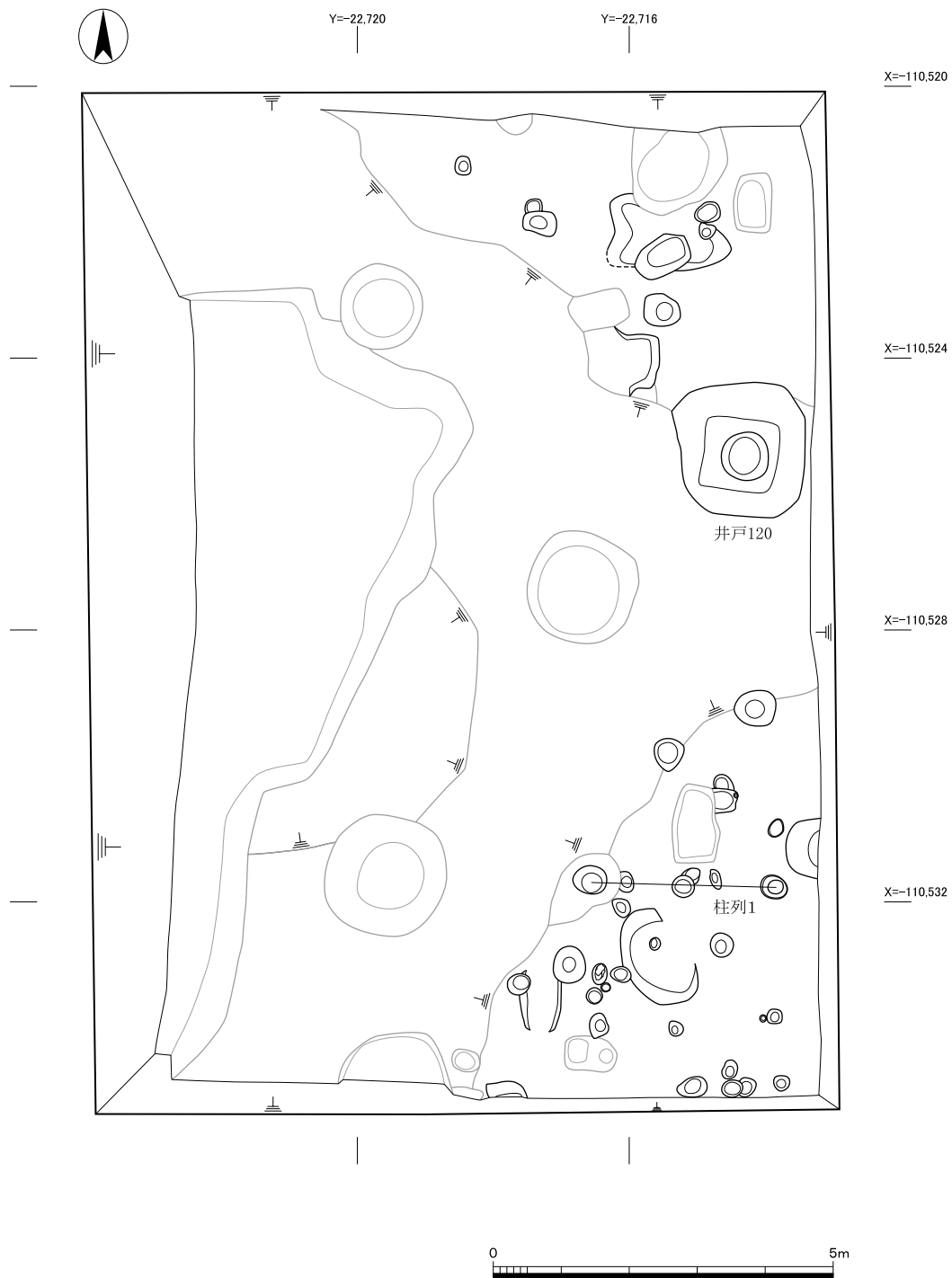
試料 76 胎土

図30 滴物質・胎土の蛍光X線分析結果2

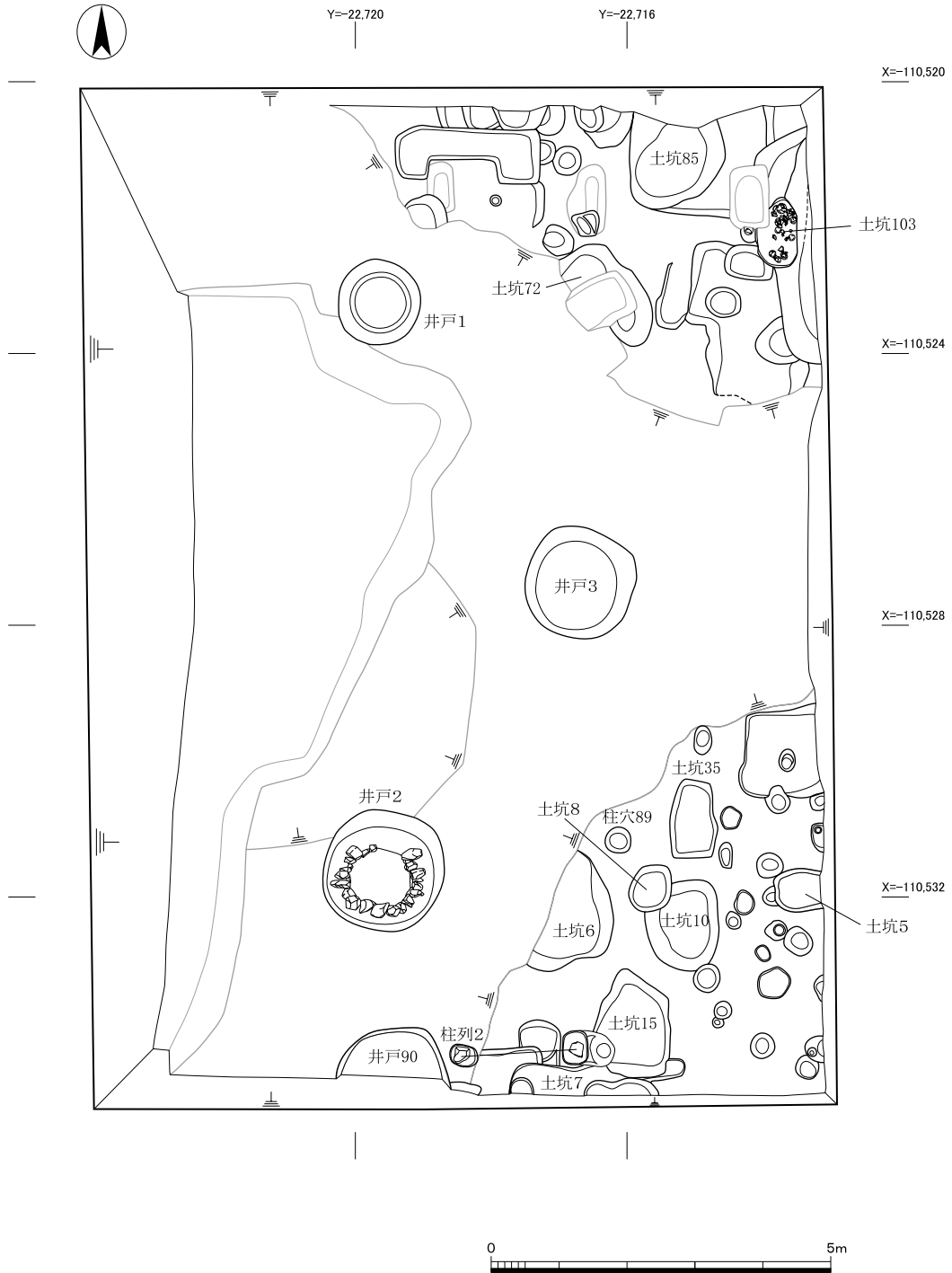
表5 各試料の無機分析結果

試料番号	出土遺構	内面:ガラス質付着箇所	同 色相	外面:胎土のみ
56	土坑150	Cu(強)・Ca・Fe(強)	白・灰	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
57	土坑150	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・As(弱)・Fe(強)	黒・赤・淡黄・白	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
58	土坑150	Cu(強)・Ca・As(弱)・Fe(強)	赤・淡黄・黒	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
59	土坑150	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	赤・黒	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
60	土坑150	Cu(強)・Ca・As(弱)	赤・黒・淡黄	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
61	土坑150	Cu(強)・Ca・Fe(強)	やや茶銅・赤	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
62	土坑150	Cu(強)・Ca・Fe(強)	黒・赤	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
63	土坑150	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・As(弱)・Fe(強)	黒・茶・赤	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
64	土坑150	Cu(強)・Zn(?)・Ca・Fe(強)	淡赤紫	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
65	土坑150	Cu(強)・Ca・Fe(強)	黒・茶・赤	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
66	土坑150	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	黒・茶	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
67	土坑150	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・As(弱)・Fe(強)	黒・灰・淡黄	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
68	土坑150	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	黒・灰・淡黄	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
69	土坑150	Cu(強)・Ca・Fe(強)	赤紫・黒	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
70	土坑150	Cu(強)・Ca・Fe(強)	赤・黒・灰・茶銅	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
71	土坑155	Cu(強)・Ca・As(弱)・Fe(強)	緑青・赤・茶・黒	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
72	土坑155	Cu(強)・Ca・Fe(強)	赤・茶銅・黒・灰	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
73	土坑190	Cu(強)・Zn(?)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	黒・灰・白	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
74	土坑190	Cu(強)・Ca・Fe(強)	黒・茶・赤	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
75	土坑190	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	黒・赤・灰・淡黄	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
76	土坑190	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・As(弱)・Fe(強)	黒・茶銅・淡黄・茶	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
77	土坑190	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	白・灰・黒	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
78	土坑190	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	黒・茶銅・赤	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
79	土坑190	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	赤・黒・茶・淡黄	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
80	土坑190	Cu(強)・Ca・Fe(強)	茶・赤・黒・淡黄	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
81	土坑190	Cu(強)・Ca・Fe(強)	赤・茶銅・黒・灰	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
82	土坑190	Cu(強)・Ca・Fe(強)	茶褐色・茶・黒	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
83	土坑190	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	赤・茶銅・黒	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
84	土坑190	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	緑青・黒・茶	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
85	土坑190	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・As(弱)・Fe(強)	赤・茶・黒・灰	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
86	土坑190	Cu(強)・Ca・Fe(強)	赤・茶銅・黒・淡黄	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
87	土坑190	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・As(弱)・Fe(強)	白・黒・灰	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
88	土坑190	Cu(強)・Ca・Fe(強)	赤・白・茶褐色	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
89	土坑190	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	茶褐色・淡黄	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
90	土坑190	Cu(強)・Ca・Pb(弱)・Fe(強)	赤・白・淡黄	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)
91	土坑190	Cu(強)・Ca・Fe(強)	赤・白	Si・K(強)・Ca(弱)・Ti・Mn(弱)・Fe(強)

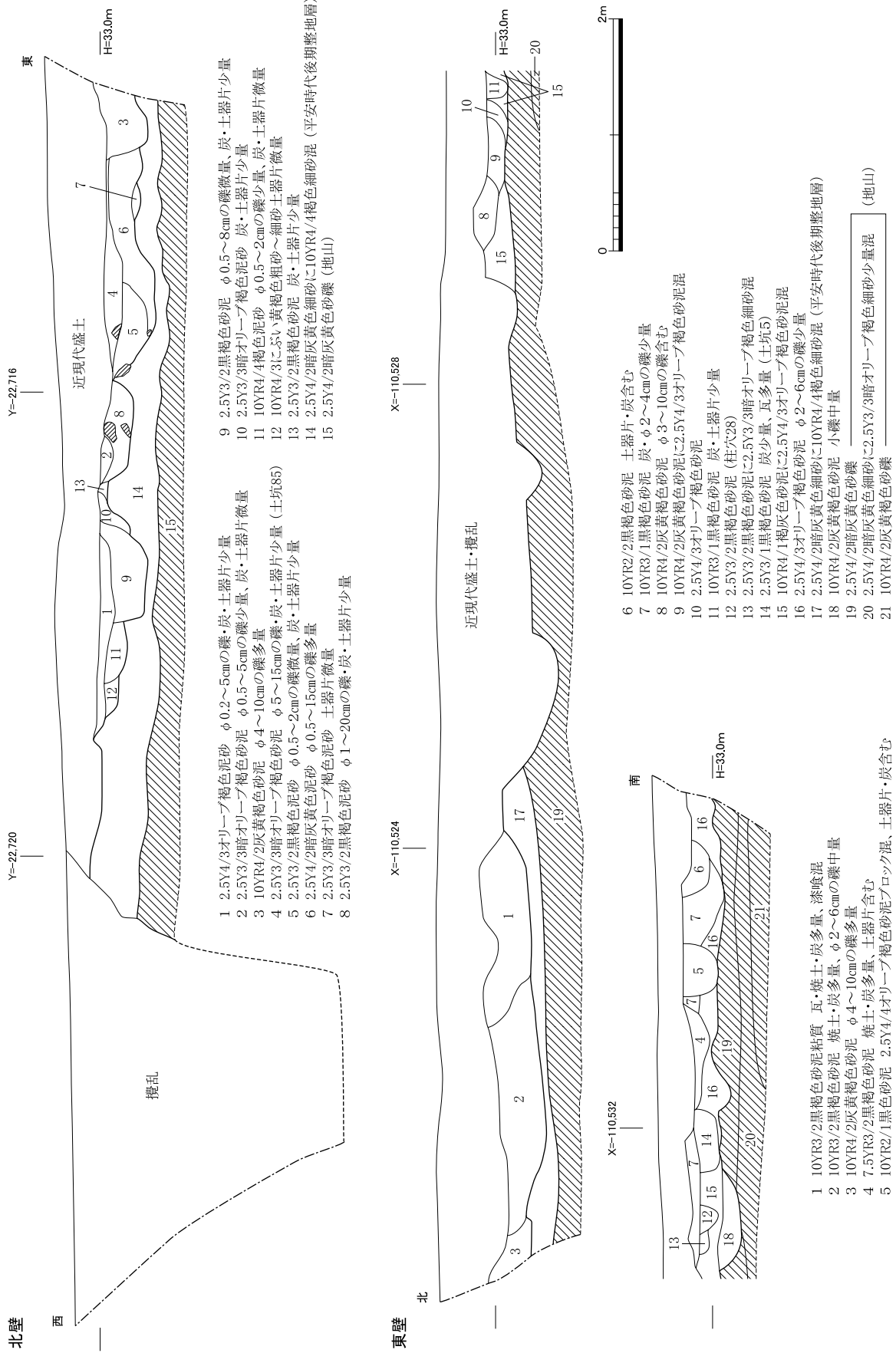
圖 版



1区第2面（平安時代中期）平面図（1：100）

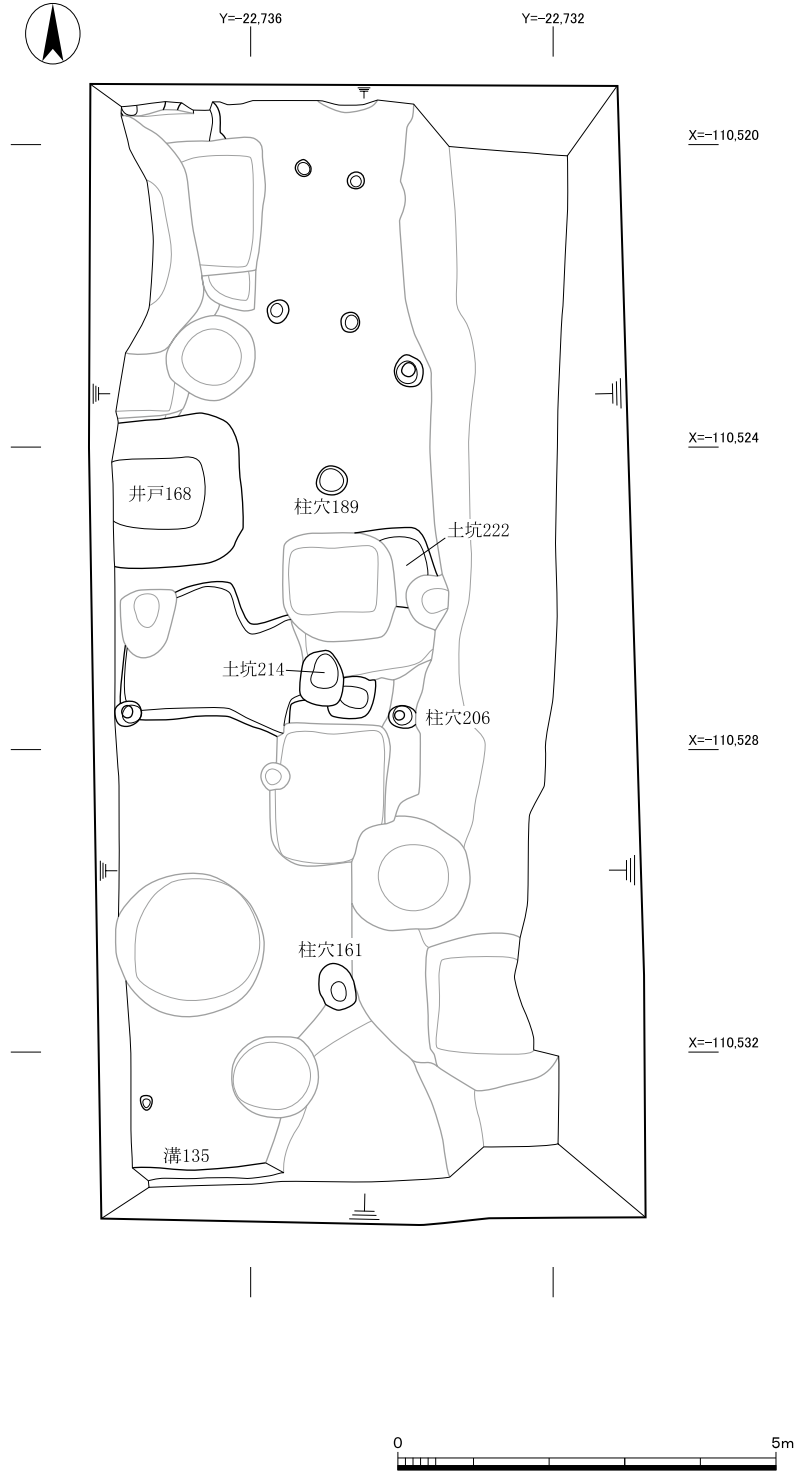


1区第1面（平安時代後期から江戸時代）平面図（1：100）

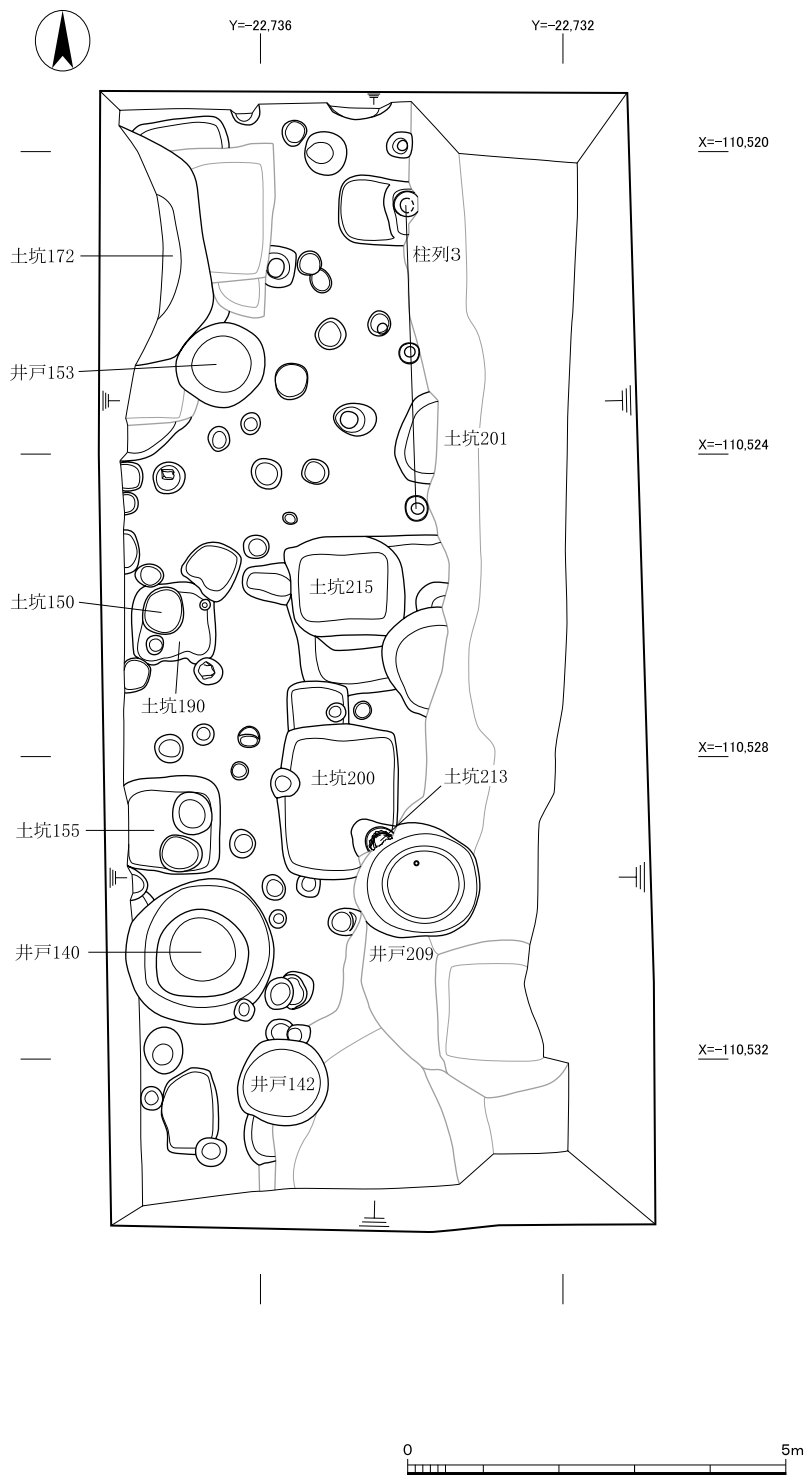


1区北壁・東壁断面図 (1:50)

図版4
遺構

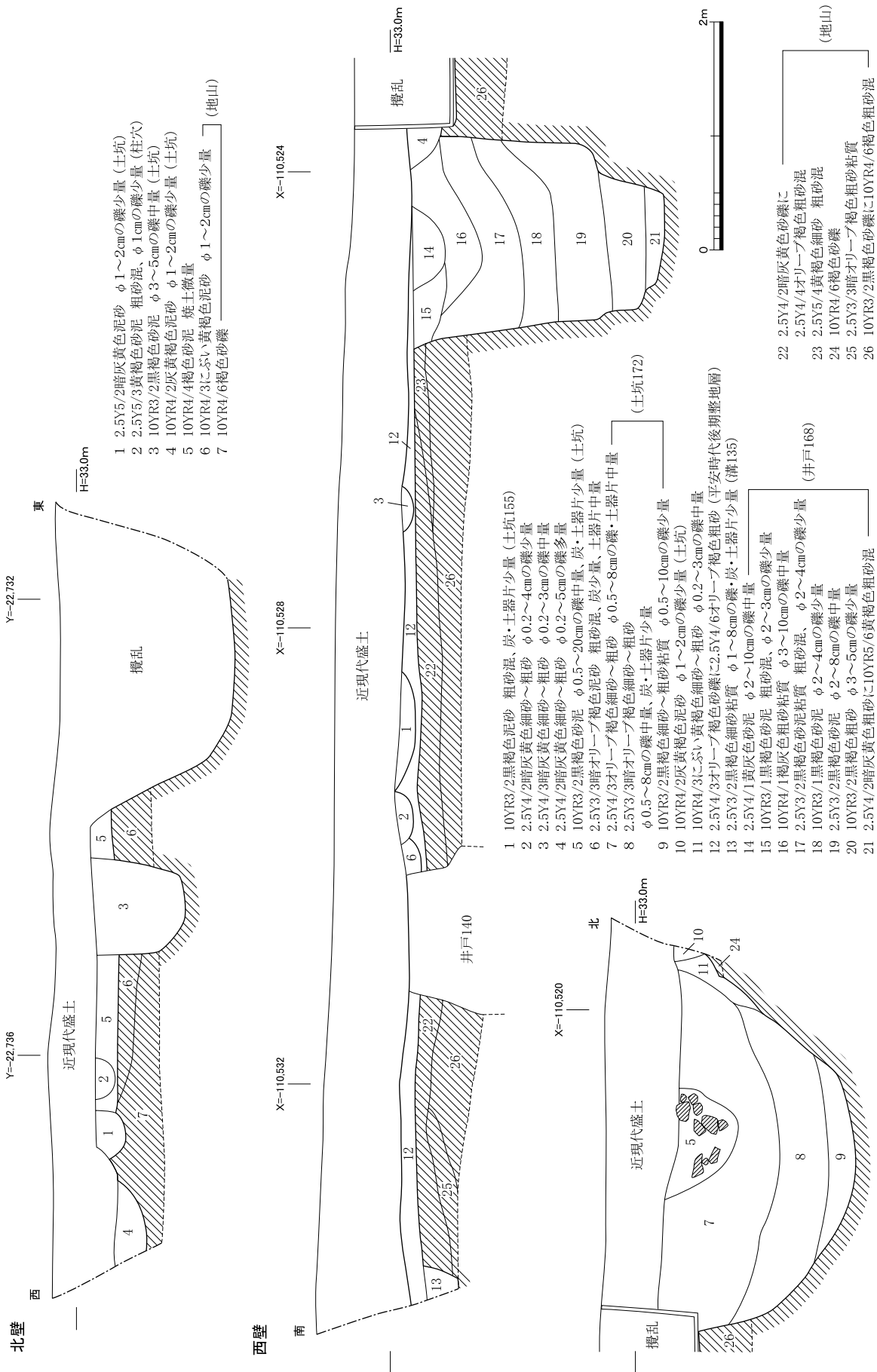


2区第2面（平安時代中期）平面図（1：100）



2区第1面（平安時代後期から江戸時代）平面図（1：100）

図版6 遺構



2区北壁・西壁断面図(1:50)



1 1区第2面全景（北西から）



2 井戸120（東から）



1 1区第1面全景（北西から）



2 土坑103（南から）



3 井戸2（南から）



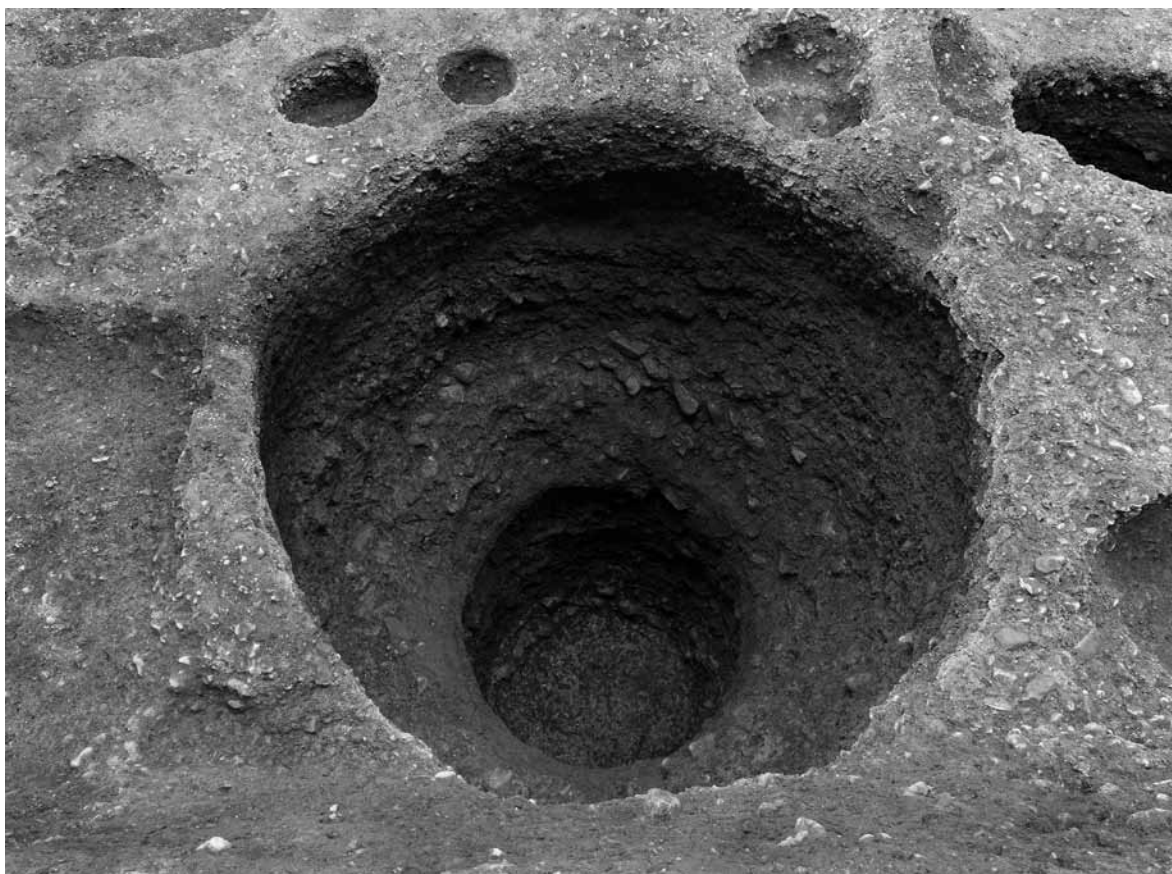
1 2区第2面全景（北東から）



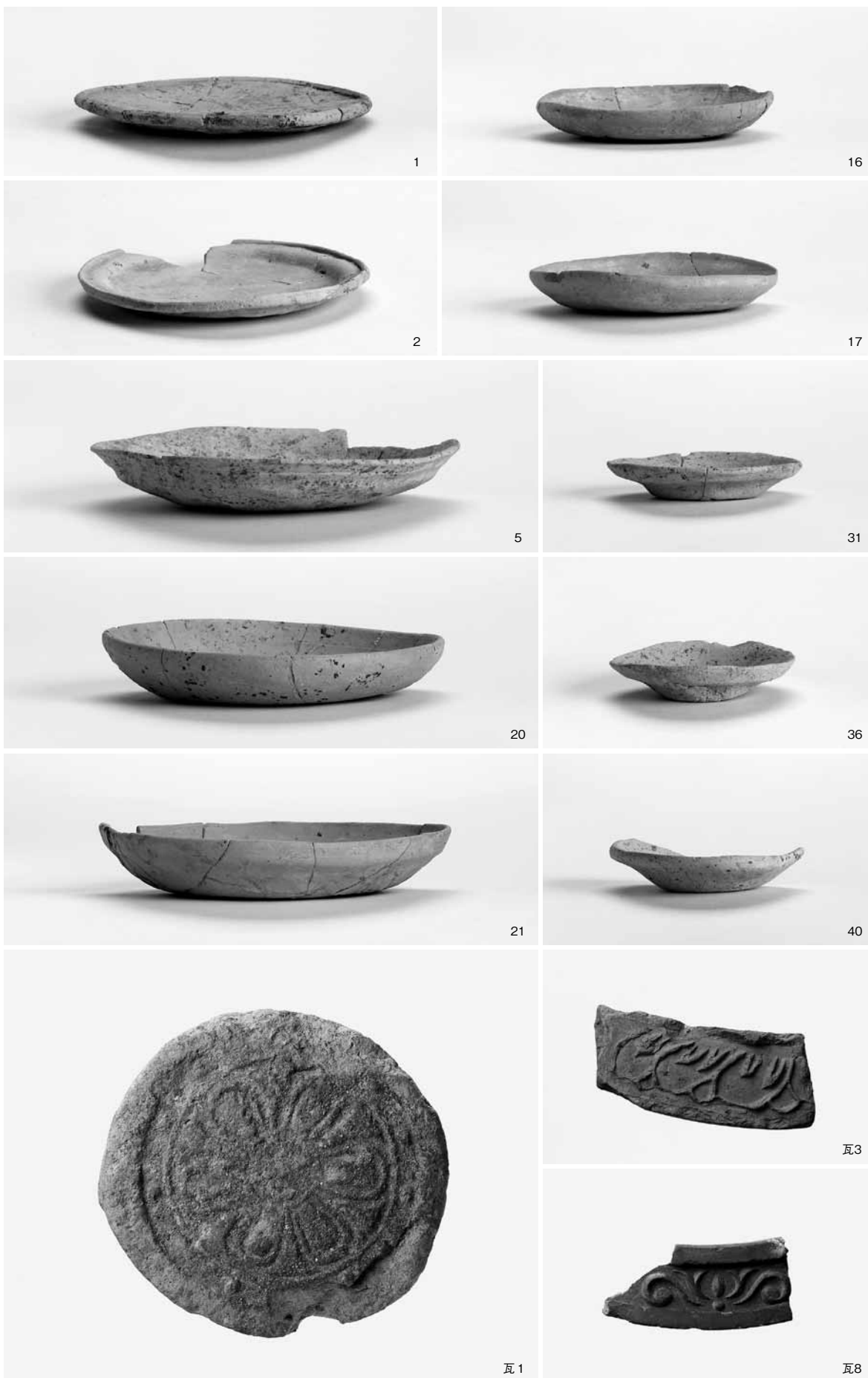
2 井戸168（東から）



1 2区第1面全景（北東から）



2 井戸140（西から）



出土土器・瓦類

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうごじょうにぼうはっちょうあと・みょうまんじのかまえあと							
書名	平安京左京五条二坊八町跡・妙満寺の構え跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2019-4							
編著者名	小檜山一良							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2019年12月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 みょうまんじのかまえあと 妙満寺の構え跡	きょうとししちぎょうく 京都市下京区 しじょうどおりほりかわにしている 四条通堀川西入 からつやちよう 唐津屋町 527番地	26100	1 708	35度 00分 12秒	135度 45分 04秒	2019年5月 7日～2019 年7月3日	270㎡	建物建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡 妙満寺の構え跡	都城跡 平城跡	平安時代中期	井戸、柱列、柱穴、土坑、溝	土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類		平安時代中期の井戸を検出した。 室町時代後期の妙満寺に関連する遺構・遺物を検出した。 江戸時代の町屋に関連する遺構・遺物を検出した。		
		平安時代後期～室町時代前期	柱列、土坑、整地層	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品				
		室町時代後期	井戸、柱列、柱穴、土坑	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品				
		江戸時代	井戸、土坑	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、土製品、石製品、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-4

平安京左京五条二坊八町跡・
妙満寺の構え跡

発行日 2019年12月27日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961